



シンポジウム

安心で安全な 里親支援の方法

-Boys Town、ケンタッキー州の事例から学ぶ-

事業報告書

2019年5月

目次

開催概要.....	2
アンケート結果.....	4
総 評	7

シンポジウム講演内容

海外シンポジスト

「ケンタッキー州の里親ケア - サービス提供者の視点」.....	9
ケイシー・スイート ユースピリタストレーニング&プロフェッショナル・ディベロップメント ディレクター	
「ボーイズタウン里親サービスの概要」.....	14
ステフ・ジャンセン ボーイズタウンコミュニティ・コントラクト ディレクター	

国内シンポジスト

「施設における CSP の取り組みと、里親支援に向けての今後の展望について」.....	18
伊藤 二三男 社会福祉法人カリタスの園 児童養護施設竹の寮 総主任	
「グループホームを支える仕組み」.....	22
菊池愛 社会福祉法人麦の子会 ジャンプレッツ サービス管理責任者 尾崎尚美 社会福祉法人麦の子会 ホワイトハウス 世話人	
「里親を育て里子を守る力」.....	25
松山 泰雄 「やっくんと子育て楽しもう会」代表、養育里親、天理教基充分教会 代表役員 (会長)	

パネルディスカッション

大阪.....	29
東京.....	36

開催概要

日 時	【大阪】 2018年9月10日(月) 10:30～16:00 【東京】 2018年9月13日(木) 10:30～16:00
会 場	【大阪】 マイドーム大阪 第1・第2会議室 〒540-0029 大阪市中央区本町橋 2-5 【東京】 公益財団法人 日本財団 大会議室 AB 〒107-8404 東京都港区赤坂 1丁目2番2号日本財団ビル
主 催	一般社団法人日本ボーイズタウンプログラム振興機構
協力・助成	日本財団
共 催	US-Japan Advanced Skill Training Center 一般社団法人エンパワメント宮崎 オッジヒューマンネット子育て支援プロジェクト NPO 法人 Com 子育て環境デザインルーム NPO 法人親支援プログラム研究会 社会福祉法人麦の子会
後 援	東京都、大阪府、和歌山県
参加費	1,000円(資料代)
参加人数	【大阪】 50名 【東京】 42名 (計92名)

制作物・配布資料

広告チラシ(1,500部)

配布資料カラー(本文36ページ、140部)

シンポジウム
安心で安全な里親支援の方法
BoysTown、ケンタッキー州の事例から学ぶ

参加費、1,000円
(資料代として当日受付にてお支払いください)

大阪 2018.9.10月
10:30-16:00 (10:00受付)
マイドーム大阪 第1・第2会議室
〒540-0029 大阪府大阪市中央区本町橋 2-5

東京 2018.9.13木
10:30-16:00 (10:00受付)
日本財団 大会議室 AB
〒107-8404 東京都港区赤坂 1-2-2 日本財団ビル

プログラム(大阪・東京 共通)
10:30-10:45 開会宣言・挨拶
10:45-11:30 海外シンポジスト発表①
11:30-11:45 休憩
11:45-12:30 海外シンポジスト発表②
12:30-12:40 昼休憩
12:40-14:10 国内シンポジスト発表①
14:10-14:40 国内シンポジスト発表②
14:40-14:50 休憩
14:50-15:30 ディスカッション
15:30-15:45 Q&A
15:45-15:55 まとめ
15:55-16:00 閉会の挨拶

シンポジウム
安心で安全な里親支援の方法
BoysTown、ケンタッキー州の事例から学ぶ

大阪 2018.9.10月
10:30-16:00 (10:00受付)
マイドーム大阪 第1・第2会議室

東京 2018.9.13木
10:30-16:00 (10:00受付)
日本財団 大会議室 AB

名入れボールペン(100本)



プログラム 【大阪】 2018年9月10日（月）

10:30-10:45	開会宣言、ご挨拶 堀健一 一般社団法人日本ボーイズタウンプログラム振興機構 代表理事
10:45-11:30	ケンタッキー州の里親ケア - サービス提供者の視点 ケイシー・スイート ユースピリタス トレーニング&プロフェッショナル・ディベロップメント ディレクター
11:30-11:45	休憩
11:45-12:30	ボーイズタウン里親サービスの概要 ステファニー・ジャンセン ボーイズタウン コミュニティ・コントラクト ディレクター
12:30-13:40	休憩
13:40-14:10	施設における CSP の取り組みと、里親支援に向けての今後の展望について 伊藤 二三男 社会福祉法人カリタスの園 児童養護施設竹の寮 総主任
14:10-14:40	里親を育て里子を守る力 松山 泰雄 「やっくんと子育て楽しもう会」代表、養育里親、天理教基充分教会 代表役員（会長）
14:40-14:50	休憩
14:50-15:45	海外・国内シンポジストによるディスカッション・Q&A
15:45-16:00	閉会挨拶 久山康彦リチャード博士 US-JAPAN ADVANCED SKILL TRAINING CENTER 代表理事

プログラム 【東京】 2018年9月13日（木）

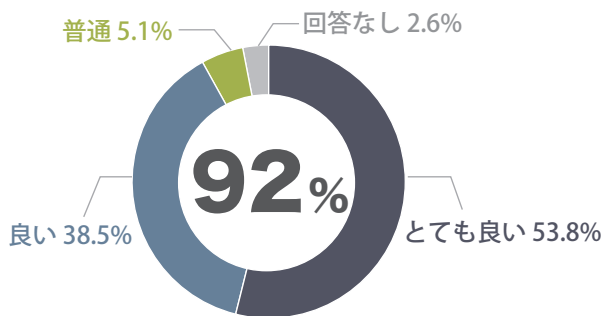
10:30-10:45	開会宣言、ご挨拶 堀健一 一般社団法人日本ボーイズタウンプログラム振興機構 代表理事
10:45-11:30	ケンタッキー州の里親ケア - サービス提供者の視点 ケイシー・スイート ユースピリタス トレーニング&プロフェッショナル・ディベロップメント ディレクター
11:30-11:45	休憩
11:45-12:30	ボーイズタウン里親サービスの概要 ステファニー・ジャンセン ボーイズタウン コミュニティ・コントラクト ディレクター
12:30-13:40	休憩
13:40-14:10	グループホームを支える仕組み 菊池愛 社会福祉法人麦の子会 ジャンプレッツ サービス管理責任者 尾崎尚美 社会福祉法人麦の子会 ホワイトハウス 世話人
14:10-14:40	里親を育て里子を守る力 松山 泰雄 「やっくんと子育て楽しもう会」代表、養育里親、天理教基充分教会 代表役員（会長）
14:40-14:50	休憩
14:50-15:45	海外・国内シンポジストによるディスカッション・Q&A
15:45-16:00	閉会挨拶 久山康彦リチャード博士 US-JAPAN ADVANCED SKILL TRAINING CENTER 代表理事

アンケート結果

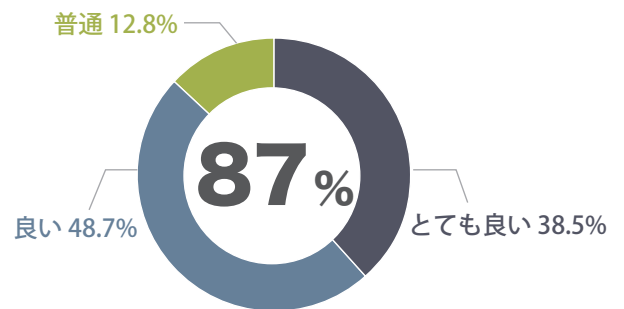
大阪会場

参加人数：50名、回答者数：39名、回答率：78%

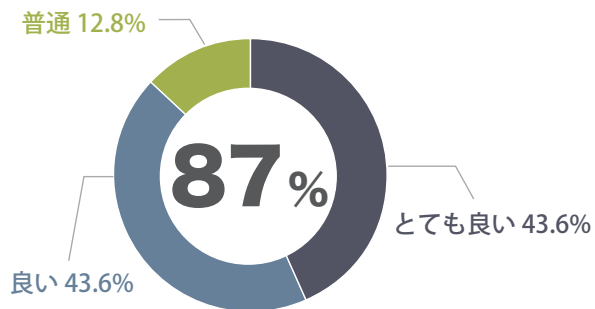
Q1. 全体的な内容



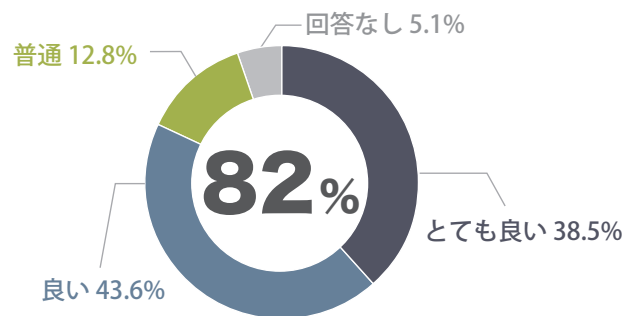
Q4. 同時通訳について



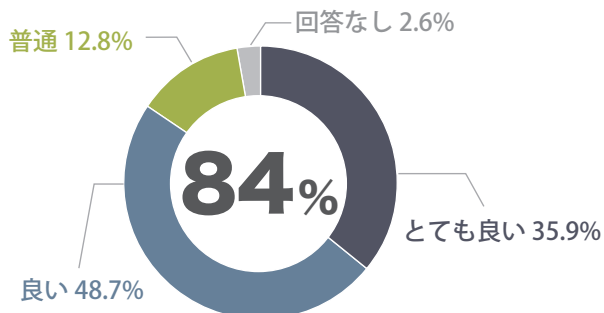
Q2. あなたのニーズ・仕事への関連性



Q5. シンポジウム全体の進行について



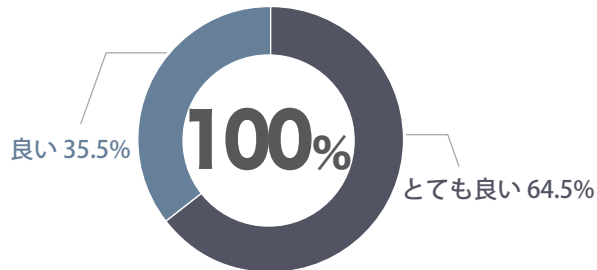
Q3. 配布資料について



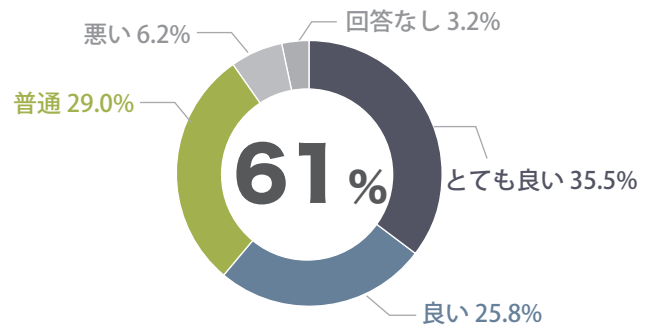
東京会場

参加人数：42名、回答者数：31名、回答率：74%

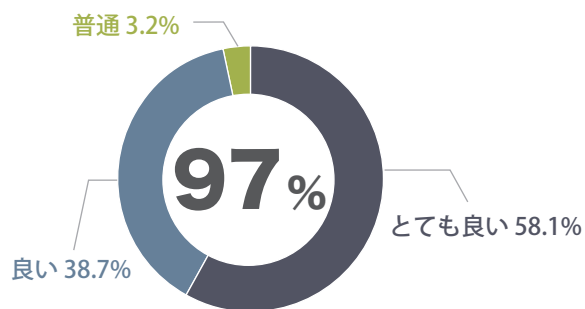
Q1. 全体的な内容



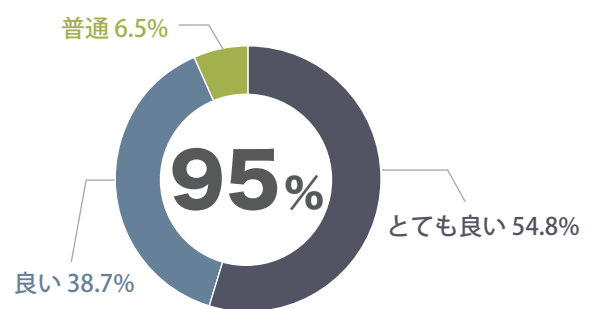
Q4. 同時通訳について



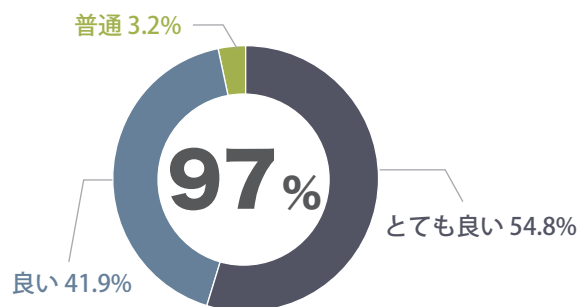
Q2. あなたのニーズ・仕事への関連性



Q5. シンポジウム全体の進行について



Q3. 配布資料について



参加者のコメント（一部抜粋）

【よかった点】

- 今後の施設のあり方を考える上で非常に参考になっています。
- 児相の立場で里親をどのように支援していくのか。何が出来、何を求められているのか考える良い機会になりました。
- 里親支援には、トレーニング、スーパーバイズが不可欠だという事が理解できてよかった。
- 今後の制度変更にもない、準備しないといけない事がよくわかりました。
- 里親になるまでの研修の重要性について学ぶことが出来てよかった。
- 「子どものために」という視点ですべての当事者が意見構築していく体制が必要だと再確認できた。
- 他の方の質問等も聞くことで、同じような悩みを持っている方を知り、解決策も見えた。
- ケンタッキー州の事例として具体的な里親への支援、里親を支援することで里子を支援する考え方、継続したコミュニケーションの大切さなどが聞け、自分の仕事の今後を考える上で、又施設がどんな方向に変わるのか残るのかをすることが出来てよかった

【改善点】

- 資料の内容に比べて時間が短い
- 資料の文字が小さいのでスライドを2つにして印刷していただけると嬉しいです。
- 通訳を通して、質問に対する答えがずれていた時があった
- ふわっとしすぎていて、もっと具体的な内容を知りたいです。
-

【要望・意見】

- 里親支援にシフトが変わり始めているため、このような機会はありがたかったです。
- 来年以降も開催され、里親支援の底上げや新たなヒントを与えて頂きたい。ありがとうございました。
- 有料 Web Cast にしてより多くの関係者がアクセスできると良い

総 評

一般社団法人日本ボーイズタウンプログラム振興機構
代表理事 堀 健一



今回、国の緊急急務となっている里親の増加と質の向上の指針となる事業をさせて頂くこととなり、日本財団さまには大変感謝しております。

この事業の総評として一番嬉しかったことは、今回の内容を全国の里親が用いて、里子に良い変化が現れたことです。

先月この内容を学んだ北海道の16組の里親さんと話す機会がありました。その一人の里親さんは、本当に子ども達は変わりました。以前は里子を叱ることが多く、関係が上手くいかないことが度々ありました。

しかし、今は里子に前もって行ってほしいことを子どもに話し出来たら褒める流れが出来て、子どもの問題が減りましたし、私も子どもを心から可愛く思えるようになりました。

また、中学生の難しい行動を持った子どもを里子に持つ九州の里親さんも、一時はいっしょにやっていけないと思いましたが、今は本当の家族の一員ですと話されました。

私達は、今回の事業を通じて、里親が行動に難しい問題を持つ子ども達を家族に迎え入れ、子ども達が社会に受け入れられるまで育てるには多くの知識とトレー

ニング、心の支えが必要なことを学びました。

里親はその在り方、マッチング、トラウマ、喪失、悲しみの癒し、アタッチメントとラポールの形成、良い行動の教え方、記録、スーパーバイスなど、多くの事柄を一つひとつ自分のものとしていかないといけません。

それを支える里親コンサルタント、里親コンサルタントを支えるスーパーバイザー、各々に専門トレーニングが必要となります。

保守的だったアメリカケンタッキー州は、時間をかけてその仕組みを作り上げました。

そして、私達は、ケンタッキーに精神的にも技術的にも支援を続けたボーイズタウンのノウハウを今回の事業で得ることが出来ました。

後は、実行あるのみ。

ボーイズタウンの言うエリートフォスターペアレンツ(その里親に委託すると、殆どの子どもを良くすることができる里親)を全国に誕生させるため、関係者々と協力しながら働いていきたいと思えます。

シンポジウム講演内容 (東京・大阪)

ケンタッキー州の里親ケア - サービス提供者の視点

ケイシー・スイート ユースピリタス トレーニング&プロフェッショナル・ディベ ロップメント ディレクター

「すべての子どもに強い味方を。絶対に子どものことを諦めない、繋がり力を理解し、子どもが最高の状態でいられるように主張する大人が必要。」これは、リタ・ピアソン先生が数年前 TED で講演したときの言葉です。里親制度では、子どもをしっかりと養育する大人がいて、彼らが子どもの強い味方であることが重要です。

ケンタッキー州 里親制度の特徴

数年前、アメリカも施設養育から里親へとシフトする方針に変わりました。これを実現するため、私たちは大きく変わらなければいけません。この変化は今日も続いていて、簡単なことではありません。私たちは移行に成功し、順調に実施していますが、正しい手順を取らないと、予想外の結果につながる可能性があります。

バランスのとれたアプローチ、子どもと家族を一番に考える

支援者と政府団体が協力し、子どもと家族を中心においた支援を展開しています。例えば、コスト面を中心に考えてしまうと、必ずしも最善の選択をすることができません。しかし、家族や子どもを一番に考えた支援によって、本当の意味での成功につながるのです。

パーマネンシーと安定性に焦点を当てる

子どもが一度措置されたら、安全で安定した措置を維持することを目指します。措置変更の回数が多いほど、子どもの成功を阻害します。

費用対効果

施設養護から里親への移行によって、コスト削減が可能です。里親に支払う費用は施設養護の約 1/5 です。施設養護の場合、1日の支給額では子どもにかかる出費の 60% しかカバーできないため、残りは寄付や他の活動によって補わなければいけません。

改善された結果

施設養護の子どもに比べて、里親制度に入った子どもは良い結果が出ています。

実親の権利を考慮する

実親と一緒にいることができない状況ですが、できるだけ物事の決定に実親が関われるようにします。

親族と擬制親族への新たな焦点

子どもの人生に深い関係性を持つ親戚や大人について

見直されています。子どもに血の繋がった親戚がいないとき、擬制親族の関係をできるだけ育みます。

サービスの「別売り」

ケンタッキー州では、サービスの「別売り」を実践しています。例えば、里親に支給される 1 日費用にはセラピーや医療サービスなどは含まれていません。そういったサービスを「別売り」することは、施設養護にも取り入れようとしているところですが、まだまだ試行錯誤の途中です。

施設と支援サービスの集中化

提供する支援の効率アップを図っています。

里親による多くの決裁権限を与える

里親は子どもに必要な養育を全て行っているにもかかわらず、実親の持っている権利や決裁権を持つことができません。司法レベルで里親が親と同様に機能できるようにする動きがあります。

里親にシフトした理由

理由 1：結果

結果としては、パーマネンシーと安定性、施設養護の子どもよりも高い成績・出席率・卒業率を含む学業の成功、安全性が挙げられます。施設よりも里親は安全性が高いです。身体的・精神的・性的虐待は施設環境の方が多く報告されています。

理由 2：費用

今まで紹介してきた方針や手順などは支援の全体的な日々のコストを下げる目的があります。子どもにかかる 1 日当たりの費用は施設養護よりも里親の方が低いです。社会保障制度では常に時間、資金、そして人材が不足しています。里親養育によって、我々の限られた資源を活用し、施設養護にかかる費用を別のところで活用し、さらに大きなリターンを得ようとしています。最後に、全体的なコストです。施設養護は里親の 5 倍かかります。しかも、この費用は実際に養育にかかる全ての費用を含んでいません。我々のような養護施設は、子どもがよい養育を受けられるように骨の折れる資金調達活動をしなければいけません。しかし、里親制度に入ってくる子どもたちは、自動的に州の医療保険に加入しているため、医療に関するサービスについて心配する必要がありません。反対に養護施設内に医療スタッフはいますが、費用がかかります。

ユースピリタスがどのようにシフトしたか

日本にやってきてからは、どのように里親へ移行したのか？という質問をよく受けますが、簡単ではありませんでしたし、嫌だとも思っていました。今日本の養護施設で働いている方が持っている質問の多くを私たちのスタッフも持っていました。設備はどうなのか？施設自体どうなるのか？施設養護を提供するのが15年前までの我々の役割でした。しかし、施設の生き残りをかけて、ビジネスモデルを変える必要がありました。財務面はもちろんのこと、子どもの未来、そして子どもと家族を一番に考えたときの答えを出さなければいけません。より地域や家庭に寄り添った支援、そして里親サービスに移行しなければいけません。州と自治体との協力なくしては、これを実現することはできません。同じ地域の支援者とパートナーシップを結び、合併することによって支援の輪を広げていきました。里親制度への移行によって、ケンタッキー州の「チルドレンズ・アライアンス」の会員になりました。これは国営の機関で、支援提供者や里親が直面する課題を解決し、システムの改善と修正を目的としています。15年間、里親移行の活動を続けてきましたが、まだ課題はあります。常に家族や子どもにより良い支援を届けるための改善の余地はあります。

他の施設との合併は、我々の成功に欠かせない要素でした。8年ほど前に合併し、今は別の施設と合併を進めています。合併によって、オンラインサービスにさらに力を入れて、効率化のアップと投資した金額以上のリターンを得るための費用対効果の拡大を目指しています。

どちらの合併も職員を解雇することなく実現できました。施設養育のスタッフは、里親サービス内の別の役割につきました。例えば、ホーム・リソース・コーディネーターとして、里子が措置される前後で里親家庭に出向き、家族を成功に導く支援をします。他にも我々の施設で直接処遇をしていた職員でケースマネージャーになった人もいます。

里親への移行は、施設や養育を提供している人たちへ与える影響を最低限に抑えることができます。簡単ではありませんが、どちらかを取るのではなく、両方を実現することが可能です。もちろん、魔法のように一瞬で終わってしまうようなことではありませんが、共通のビジョンを持つということなのです。たくさんの労力と専念する気持ちが必要です。大変な状況になっても、その道から逸れないという強い気持ちが必要です。それができたときに、シフトすることができ、今でもそのシフトを続けているのです。ケンタッキー州では、家庭外措置される子どもが9000人以上いたところから、現在では1000人以下と大幅に減少しています。ここからさらに下げるためには、さらなる努力

が必要です。しかし、専門的な施設養護のニーズがなくなることはありません。治療の必要な子ども、また発達課題や激しい行動などによって、家庭養育が最善ではない子どももいます。今後も、治療を提供する特別な施設養育は必要です。私たちの中でもそういった専門的な施設に異動した職員がいます。

主な障壁

里親のリクルーティングと保持

これからお話しする課題については、日本でも共通している内容だと思います。はじめに、里親のリクルートは常に継続して行なっている活動です。多くの時間と資金を里親のリクルートと維持に費やしています。我々がトレーニングした里親が全員里親を続けてくれればそれ以上嬉しいことはありませんが、そうはいきません。中には思い描いていた里親としての生活と実際の生活にギャップを感じ、準備不足だった里親もいます。プログラムを続ける意志を持った、献身的で質の高い養育者を探すことは大変です。

政府や地域からの出資

資金不足は常に直面している問題です。州政府と連邦政府のどちらにも言えます。残念ながら、私たちが国から受けとる資金だけでは、運営している施設プログラムにかかる全ての費用を補うことはできません。しかし、施設内で里親制度を活用すると利益が出ます。セラピーなどの治療費を別途請求することができます。ケースマネジメントサービスの中で、私たちが医者にかかった場合、州政府にその費用を請求することができます。施設養育に比べてはるかに費用対効果が高いです。

トレーニング

面倒なトレーニングを避けたいと思う里親が出てきます。しかし、トレーニングは私たちの活動の要となっています。里親が認定される前と後のどちらの段階でも質の高いトレーナーが必要です。この人たちを見つけるのが大変なのです。

支援

はじめは、メンターやピアサポートプログラムを提供していませんでしたが、里親のフィードバックや満足度調査をする中で、支援を受けられること、支援されていると感じること、自分の意見を聞いてくれているとわかることが里親や子どもの長期的な成功に大きく関係しているとわかりました。両方が満たされたとき、里親は少し難しいケースであっても受け入れ、成功させていくことができます。

私たちのプログラムのもう1つのポイントは、連続した支援提供ができ、レスパイトケアを提供できることです。レスパイトのときには、里親が充電して休めるように、子どもを数日間施設で預かります。子どもと

の間に衝突があるときには、少し離れることで子どもにとっても休息になります。

他にも、里子を今は預かっていない里親がレスパイトケアを提供することもできます。一定の期間、レスパイトケアを提供するために家を開放します。

最後に、我々の現在の焦点は十分な時間なデイケアや放課後サービスを提供することです。地域が提供していないものがあれば、自治体や地域の団体と話して十分なデイケアや放課後サービスが受けられるようになります。ケンタッキー州は農地に囲まれた大きな街が2つあるため、地域によって人口統計が大きく異なります。大きな街にはすべてのサービスが整っていても、田舎ではサービスを受けることができません。そこで、都市部以外でもサービスを受けられるようにすることが私たちの新たな狙いです。

ユースピリタスが提供する多様な支援サービス

施設養護から里親に移行を始めた当初、子どもをグループホームから出して里親家庭に措置するために、その過程を急ぎすぎてしまいました。ビジョンを再構築したとき、実現したいことを明確にして、実現するためのモデルを考えました。その過程で、里親が子どもを預かる前、最中、過程全体を通して必要な支援があることを見つけ、それは今日にも受け継がれています。トレーニングの面では、一定の過程と同時にプレサースビストレーニングを提供します。トレーニングの中には、私たちの里親プログラムに参加する家族には必須科目となっているペアレンティングのクラスを受けてもらいます。

里親になりたいけど、いまいち到達できていない家族や何か自分で学ばなければいけない家族に対しては、お金のやりくりの仕方から仕事の面接方法まで様々なスキルトレーニングを提供しています。他にも、ペアレンティングクラスを実施しています。子どもが受けたトラウマの影響、どのようにトラウマが子どもの行動に影響するのか、再びトラウマを与えないための方法などトラウマインフォームドケアに基づいた内容をトレーニングします。

最新の支援方法としては、里親家族にオンラインベースのトレーニングを提供しています。我々のキャンパスやどこか別の場所に必須のトレーニング科目を受けに行く手間が省けます。今のところ、このサービスはとても好評です。

先ほどもお伝えした通り、施設養護のサービスは必ず何らかの形で必要になります。例えば、特化した治療やサービスです。我々の施設では、薬物やアルコール依存の治療に重点を置くようにシフトしてきています。これは、薬物乱用の過去がある里子にも提供して

いるサービスです。

特化した治療やサービスには治療の必要な子どもの里親へのレスパイトケア、ピアメンタリングや支援、生活スキルの学習、危機の安定化などがあります。こういったサービスによって、子どもの長期間の入院を防ぎ、子どもが危機的な状況に落ちいったときに再びコントロールを取り戻すための助けとなります。例えば、投薬治療や投薬の種類の変更によって、子どもが里親家庭に戻れるようにします。

他にも地域ベースで子どもに近い人たちがチームとなって行うラップアラウンドサービスを提供しています。インホームセラピーや学校ベースのサービスを提供します。精神的な支援や自治体とのパートナーシップを結ぶ活動をしています。ケンタッキー州では、信仰や宗教は人々の生活の中で大きな役割を担います。団体としてもそれを提供できるようにしています。

最後に継続したケースマネジメントです。ここで個別化されたサービスプランが作られます。家庭訪問は週に1度行われ、月に1度進捗レポートを州と私たちの施設に提出します。

里親には継続してトレーニングを行います。初めのプレサースビストレーニングや認定でトレーニングが終わることはありません。里親もトレーニングを受け続ける必要があります。

必要に応じて、交通手段の提供、支援を受ける手続きの援助、全体的なサービスの連携をしています。

子どもが受ける医療、歯科、心理、そしてその他施設外のすべてのサービスにおいて、私たちは関わりを持っていきます。すべてのサービスが正しく行われ、子どもが必要なケアを受けていることを確認します。

成功の鍵

教育

継続して、長期的な成功をするための鍵があります。1つ目で最も重要な鍵は教育です。里親制度の紹介や里親になることのメリットについて地域を教育すること。里親とは何なのか。時に、里親について美化している人がいます。子どもに向かって腕を広げていれば、子どもは腕に飛び込んできて、すべてが美しく進むと思っています。多くの場合、そうはいきません。里親になるということ、里子になるということには、それ以上のことがあります。里親はそのことについて理解を示し、里親になったらどうなるのかを分かっていることを確認します。里親は子どもが必要としていることを行う準備ができています。里親のリクルートは継続して行う活動であり、大変重要な作業です。リクルートをするときには、そこに専念しなければいけません。

里親に興味を示して、その人との会話が始まったら、連絡を取り続け、必要とされているように感じてもらうことが大切です。せっかく里親に興味を示しているのに、フォローアップをしなければ意味がありません。

トレーニング

トレーニングは要となります。そして、前に進むための鍵となります。

スーパービジョン

里親へのスーパービジョンは、プログラムをしっかりと維持し、できるだけ良い結果を出すための鍵となります。私たちのモデルは正しく適用されれば、1つの家族から次の家族へと変わっても、ニーズに応じるために同じように再現することができます。これは、スーパービジョンが提供するオープンなコミュニケーションによって可能となります。スーパービジョンは、施設や施設スタッフが里親の間違っているところや、うまくいっていないところを批判する場所ではありません。多くの里親は、言われなくてもあまりいい仕事できていないように感じる場合があります。そのため、

完璧を求めているわけではないのだと里親に知らせなければいけないのです。里親は、子どもの側にい続けることが大切なのです。

スーパービジョンの伝統的な考えでは、家族やスタッフと会って、間違っていることだけを指摘するというイメージがあります。しかし、これは正しくありません。スーパービジョンでは、開かれた会話をして、里親が自分の意見が届いている、支援されていると感じることが重要です。この2つの要素は里親として活動する上に満たされなければいけないと私たちの里親は話しています。

これら4つの鍵全てが組み合わさって動くことによって、長期的な成功につながります。これは、私たちが日々調整と改善を繰り返していることです。里親が最高の状態で、子どもへ最高の結果を出せるように、私たちも最高の団体として支援をし続けます。



質疑応答

「東京都などもポスターをつくって広く里親募集をしています。なかなか集まらないようです。ケンタッキー州ではどのように広報活動をしていますか？」

私たちもポスター、バナー、看板などを活用しています。設置して誰かが問い合わせしてくれることを待つという受動的なリクルート方法です。もっと能動的な活動としては、お祭りや就職フェアへの参加があります。就職フェアへやってくる人たちは仕事を探していますが、「専門的な親」という意味では適しているのではないかと思います。正直、試したことのない方法がないといってもいいほど様々な手段でリクルート活動をしています。その場において我々の存在を示すだけの活動が多いです。相手が嫌になるほどしつこい勧誘はしませんが、それに近い活動がなければリクルートは難しいです。

「具体的にこれから里親を始められる人達にとって力になるサポートというのがどのようなものか教えてください。」

子どもと関わる上で、「相手のおかれた立場に寄り添う」ことが大切だと言いますが、これは里親にも同じことが言えます。家族や状況によって提供できる支援の形は異なっていきます。しかし、多くの場合、里親の話をいつでも聞けるような状態を維持することが大切です。多くの質問は子どもの行動やどのように行動に対応するかという内容です。他にも交通手段や受けられる支援サービスの情報、就職の情報など、私たちは全てに対して支援ができます。そのためにケアマネージャーやホーム・リソース・コーディネーターがいます。個々の家族のニーズを分析、評価し続け、それを実現するためのプランと方法を提供します。

「ユースピリタスの子どもの定員は何名ですか？」

施設養護を受けている子どもが155人います。学校ベースのサービス、外部からやってくる子どものセラピー、里親を含む地域ベースのサービスでは300ケース以上を扱っています。その内、82ケースは里親措置で100人余りの子どもがいます。

「年間何組くらいの里親さんがレスパイト先として子どもを受け入れていますか？託児と放課後の子どもの支援の運営や規模についても教えてください。」

レスパイトケアとしては、それだけをしている家族はいません。ただ、レスパイトケアを提供したいと言っている家族は3～4組います。レスパイトの大半は私たちのキャンパス内にある施設で行われます。現在、他の団体と一緒に包括的なデイケアサービスや放課後プログラムを提供できないかと話しているところで

す。他には、地域の中で子どもを預かってくれるところを里親と一緒に探します。インホームケアやデイケアを提供している個人や1日に複数人の子どもを預けられる場所など様々です。団体として、都市部以外でもこういったサービスを提供できることを目指しています。

「里親さんへの委託費は子どもの年齢や状態によって違うと思うのですが、毎月、または1日の金額を教えてください。」

1日の最高平均額は一番難しいケースが47ドルで、そこから子どもの状況に応じて下がっていきます。ケンタッキー州は5段階に分けられています。治療の必要な子どもやその他のニーズがあれば、その費用も負担されます。1日が47ドルだと、1ヶ月で1,400ドルです。これに対して、施設養護の場合、施設が受け取る費用は1日250ドルですが、これにはすべてのサービス費用が含まれます。そのため、実際にかかる費用の60%ほどしかカバーされないのです。財務面で考えても、こういった状況の中でサービスを提供し続けることは難しいです。

「現在、私が働いている乳児院でも施設の機能転換を目指して取り組みを進めているところです。機能転換に際して、いろいろ大変なことがあったというお話がありました。特に大変だった点は何ですか？また、施設契約機能と里親支援の機能の2つを機能があると思いますが、なぜ施設ケアの機能が必要として残されているのでしょうか？」

施設養護から里親に転換するときには、不安しかありませんでした。今までやってきたことを変えるのは難しく、人間は本能的に変化を嫌います。しかし、一度成功を収めると、内的・外的に我々がやってきた変化が良い結果を導き、恐怖心を払拭してくれました。簡単なことでも心地よいことでもありませんが、とても大切です。

なぜ団体内で2つの機能を維持しなければいけないかという、必要だからです。どのようなビジネスにおいても、市場を見て、お客さんが欲しがっているものやニーズを知り、そこに応えていかなければいけません。転換を進めていく中で、里親サービスと施設養護の均衡点を見つけました。施設養護が必要な子どもは、まだ里親に措置される準備ができていないのです。我々が提供するサービスの中で、病院からのステップダウンの役割を持つ施設プログラムがあります。再統合プログラムに組み込まれていて、基本的には短期の入所になりますが、施設養護プログラムの一部です。需要があったので、これを増やしました。子どもが退院する際、すぐに家に帰るのではなく一段階ステップダウンする施設を求める声がありました。その声に応えた結果です。

ボーイズタウン里親サービスの概要

ステファニー・ジャンセン ボーイズタウン コミュニティ・コントラクト ディレクター

ボーイズタウンは1917年にエドワード・フラナガン神父の「悪い子どもはいない。悪い環境、手本、状況があっただけ。」という考えのもとに誕生しました。以来、フラナガン神父は最も弱い立場にいる子どもたちに救いの手を差し伸べてきました。支援は米国内に留まらず、世界中の子どもたちに広がりました。第一次世界大戦後、来日したフラナガン神父は神戸の児童養護施設に最初の支援の種を蒔きました。それらの種が数十年の歳月を経て、「コモンセンスペアレンティング」プログラムの普及という形で芽吹き、皆さんの手で育てられてきました。これは日本における里親プログラムの基盤となるでしょう。

しかしながら、里親の普及は簡単なことではありません。抵抗感や懸念を持つことでしょう。新しい局面において、不安はつきものです。アメリカでは、1989年に施設養護から里親委託に方針が変わり、日本と同じような転換期がありました。これは私たちにとっても挑戦でした。たくさんの恐れや抵抗がありましたが、転換によって生み出された利益や変化も経験してきました。今日は、皆さんにボーイズタウンが経験した課題と成功へ導いてくれた基盤を紹介します。

日本はどのように施設委託率を86%から18%に減らせばいいのか。皆さんの頭を悩ませている大きな課題だと思います。フロリダ州にある私たちの施設では、2001年に800人の子どもが入所していましたが、2016年には86人になりました。プログラムは発展を続け、現在では地域の里親サービスを先導しています。また、インホームケアやペアレンティングプログラム、学校のプログラムなども提供し、家族を支えています。

暗いトンネルの先には光が差し、そこに到達するための道のりがあります。しかし、その道のりには計画が必要です。福祉の仕事では、私たちの心が指し示す方向へ動くことが多いでしょう。仕事に情熱を持ち、子どもや家族を助けることに使命を感じます。しかし、心の声にだけ耳を傾け、頭とのつながりを絶ってしまうことは、失敗を招きます。アメリカでは「誰も失敗をするための計画はしないが、計画することを失敗する」という格言があります。計画には、心と頭を結びつける重要な役割があります。

ボーイズタウンモデルの特徴

児童虐待とネグレクトの認識と里親制度の不適切な利用
それでは、どのように支援の計画を立てることができるのかを見ていきましょう。施設養護から家庭的養護

に移行する上で多くの文化的な課題が見えてきました。一つは、施設養護の中で児童虐待やネグレクトが行われていたこと。そのため、子どもにより安全な養育の環境を提供することが重要でした。もう一つは、里親制度の不適切な使用。アメリカでは、目標数値を達成するために多くの子どもが里親制度の中に押し込まれていきました。里親措置の準備ができていない子どもが数値目標のために里親へ措置されました。本来は施設に入ってから里親に移行すべきところを最初から里親に措置されたため、子どもや家族にとって最善の決定ではありませんでした。私たちは、適切な措置先についてよく考えなければいけません。子ども全員が里親制度の中で成功できるわけではなく、計画が必要なのです。

子どものアタッチメント、親との繋がり

子どものアタッチメントも考慮しなければいけません。例えば、現在6歳で生まれた時から施設で育った子どもがいます。この子どもは、施設職員にアタッチメントを持っています。そして、同じように両親に対してもアタッチメントを持っています。そのため、移行する中でアタッチメントが途絶えないようにしてあげることが大切です。

最も制限の少ないケア

子どもにとって最も制限の少ない環境が最善だということを忘れてはいけません。子ども時代を施設環境で過ごす、社会生活、仕事、将来の家族に健全で長期的な繋がりを促進しません。反対に里親家庭や長期的な措置をされた子どもは、家族や仕事の役割、日々の活動などの枠組みを理解します。これは、私たちの里親制度に対するアプローチに影響を与え、枠組みやプログラムの構築に役立ちました。

ボーイズタウン教育モデルプログラムのホールマーク (特徴)

安全性、パーマネンシー、健康と幸福

私たちが計画するときには、ボーイズタウンのホールマークを元に作り上げていきます。安全性とパーマネンシーは常に一番に考えます。何をするのかを考えるときに、子どもや家族の安全性を一番にしています。同時に、私たちのスタッフの安全性も大切です。

家族との関わり

子どもの支援において、家族の関わりは重要です。子どもには繋がりをもち続けたい血縁関係のある家族はいますか？家族との関わりの中には、里親も含まれます。

最も近い人たちが主に変化を与える

子どもに一番近い人が最も影響を与える人物であるという考えがあります。施設養護から里親に移行する際、施設職員は自分がこの業界のプロだと感じています。たくさんの訓練をして、多くの情熱を持って子どもに関わり、一番いい支援を提供できると思っています。そういった役割の一部を里親家庭に移行しなければいけないことは、難しいかもしれません。しかし、子どもが里親と暮らしている以上、一番子どもに変化を与えることのできる人物は里親です。それでは、どのように里親家庭を支援すればいいのでしょうか？

プログラムの大枠を見ると、様々なレベルで影響を与える人たちがいます。子どもにとって一番大きな影響を与える人は里親ですが、里親にとって一番大きな影響を与える人はコンサルタントです。里親家族もたくさんの支援が必要です。そのため、観察やスーパービジョンを通して、私たちは里親家庭を支援していきます。

私たちが直接子どもに関わる機会は少ないです。なぜなら、私たちが子どもに一番影響を与える人物ではないからです。里親が一番子どもに影響を与える人物なので、里親家庭の中で支援をするときには、里親へのモデリングや練習はしても、子どもに直接指導をすることはありません。これは、里親が一番影響を与えるのだという理解を維持するためです。

行動中心

ボーイズタウンは行動に焦点を当てています。ディレクター、スーパーバイザー、直接処遇職員、里親、親の全員が行動に関する知識を持っていないわけにはいきません。行動は欲求のコミュニケーションです。それだけなのです。ときに、子どもは大きな欲求を持ち、大きな行動に出ます。しかし、私たちは一歩下がって、行動の目的を理解し、欲求を満たし、その欲求を満たす他の方法を教える必要があります。行動を理解することは、個別化されたスキル習得につながります。子どもは一人一人違います。そのため、子どもに教えるスキルは個別化しなければいけません。里親にも同じアプローチで接します。里親が成功するために必要なスキルも個々によって異なります。基盤をもち、スキルをベースに欲求を特定する方法を理解し、スキルをマスターできるように練習し強化します。

再現可能、結果重視のプログラム

プログラムは再現可能でなければいけません。先ほどの計画に戻ります。心から生まれたものは再現できません。頭の要素、つまり計画が必要です。何かを行い、それを成功させるためには、様々な環境で再現可能でなくてはなりません。再現できるということがカギとなり、これは結果によって異なります。結果を測る唯一の方法はデータです。データは私たちの味方です。データを集めるためには、何を探しているのか、どの

ような結果になったのかを明確にして、常に分析を繰り返さなければいけません。

内的、外的な要素の組み合わせ

最後に、内部・外部との協力です。団体の内部だけでなく外部の支援者とも協力し、わかりやすいコミュニケーションを目指さなければいけません。これは、里親との協力も含まれます。里親や団体と内的な繋がりを持つことで、成功に導きます。外的な協力関係は、他の支援者、他の団体と繋がりを持つことです。里親が他の里親と繋がりを持ち、お互いに共有し、学び合える環境があるかを確認しましょう。

ボーイズタウンモデルの要素

スキル指導、健康的な関係構築

次に、どのようにホールマークを実現するかについて話していきましょう。どのようにこれらの大まかなホールマークを計画し、実現し、維持するのか。まずは、スキル指導から始めます。必要なスキルの特定とスキル指導の能力と専門性をもつこと。これは全てのレベルのプログラムに対して言えることです。施設の最高レベルのディレクターであっても、施設職員、ファミリーコンサルタント、里親、親、全員です。全員がスキルを教える方法を理解して欲しいのです。スキル指導は健全な関係構築につながります。子どもが成功するために必要なスキル指導の時間をとると、子どもは大切にされていると感じ、健全な関係構築に貢献します。

宗教と信仰の応援

人にはスピリチュアルな要素があります。身体、頭、精神の3要素が健康的な発達と長期的な地域への貢献に必要です。宗教的な要素に注目することは、一番難しいかもしれません。里親から「なぜこれをしなければいけないのか？」と質問を受けます。宗教と信仰は、気持ちの上で重要なだけでなく、自分よりも大きな存在を信じることで、強く長期的な人間関係の構築を助けてくれるという研究結果が出ています。

肯定的な家族環境

子どもには、健全な家族がどのように見えて、感じて、機能するのかを体験して欲しいと考えます。肯定的な家族環境や家族の関わりを意図的に作っていかなければいけません。例えば、日課、家族との活動、面白い活動などです。他にも家族の中の伝統があるかもしれません。それを作ること、または、それを行うための計画があるということは里親プログラムにおいて大切です。

里親サービスプログラムの特徴

ボーイズタウンの里親モデルは、安全性とパーマネンスを一番考えています。子どもの安全、措置先の

家族の安全、そしてスタッフの安全。全てのレベルにおいて安全第一で取り組んでいます。子どものパーマネンシーについては、同じ場所で子どもが長く生活するほど、成功する確率が高まります。はじめからそこを目標にしたいのです。

常に里親が最も影響を与える存在だということを忘れてはいけません。私たちからすると、私たちはこの分野の専門家でたくさんの知識があるように感じます。しかし、子どもと一緒に暮らしている人たちが子どものことを一番よく知っています。そのため、私たちの仕事は里親が子どもと今以上に繋がりを持ち、支援できるように支援をします。

ボーイズタウンの介入は強みに着目します。すでに上手にできているところを見つけて、そこに積み上げていきます。これは、自信や自立につながります。うまくいっているところに着目し、足りないところを個々に合わせて埋めていくことが大切です。難しい領域に関しては、個別の計画を作らなければいけません。

治療に関する全ての決定はデータに基づいています。そのため、しっかりデータ収集をしなければいけません。また、家族中心に考えます。介入は家族が行える範囲で考え、子どもに着目します。

個別のコンサルテーションや支援を里親とコンサルタントに提供します。スーパービジョンなしでは、プログラムは失敗します。これは躊躇なく言えることです。アメリカで失敗してきたプログラムには、スーパービジョンの計画が組み込まれていませんでした。心だけで突き進むことはできません。互いを支え合うためには計画が必要です。そして、定義できないことを支えることはできません。

サービスとパーマネンシーの目標は、チームで達成します。いくつものレベルでチームメンバーがそれぞれ関わりを持ちます。チームの中で一人が処遇について一方的な決定をするわけではありません。多方面からの意見を取り入れたアプローチを使い、意思決定のプロセスには、子どもに影響を与える全員が参加します。

役割の定義

何かを始める前にまずは計画が必要です。この計画は、役割を定義するところから始まります。誰かに「里親になりませんか？」とリクルートする前に、まずはどのようなことを期待し、どのような責任があるかを説明しなければいけません。里親、ファミリーコンサルタント、スーパーバイザーにはそれぞれ決められた役割と責任があります。

これらの役割を定義したら、目的に向かって動き始めることができます。主な目的の1つは、里親、子

も、施設、そして可能な限り実親が関わりを持つことです。この関わりをエンゲージメントと呼びます。もう一つはラポール形成です。子どもだけでなく、里親とのラポールをどのように構築するのか？ラポールは信頼の構築とコミュニケーションです。ラポール形成によって健全な関係構築につながります。

常にアセスメントをすることも重要です。誰が里親家庭を評価しにやってきても、同じフィードバックや情報を伝えなければいけません。評価にやってくる相手によって全く違うことを言われてしまうと、里親のイライラの原因になります。それを防ぐためにも、どのような領域でアセスメントをされるのかを明確に定義することが大切です。介入の計画を立てることに役立ち、子どもと家族の進捗状況の評価を続けることができます。

成功への鍵 - トレーニング

コモンセンスペアレンティング

目的を定義したら、次はトレーニングです。定義から実践に移っていきます。トレーニングをしていない人たちに目標達成、期待することや責務の遂行を求めることはできません。全ての里親は、私たちが期待する内容や責務を全うするために必要なトレーニングを受けます。こうすることで、里親の責任が問われるようになります。何も教えていない人に対して、責任を問うことはできません。どこか別のところで学んできただろうと推測することもできません。これは先生に例えることができます。ペアレンティングは先生になることに似ています。コモンセンスペアレンティングに参加したことがある方ならわかると思いますが、最初のセッションは「親は先生」です。親は子どもにとっての最初の先生なのです。私たちは子どもへ愛し方、トイレの使い方、読み方などを教えます。親には子どもに教えるスキルがあります。しかし、このスキルは専門職としての先生のスキルとは全く違います。私自身、教員をしていました。大学で4年間学び、自分の子どもにとっての先生という立場から、学校で教える専門職としての先生になるレベルまで徐々に上がって行きました。里親も同じように捉えることができます。ボーイズタウンに所属する里親は、自分の家庭でうまくいった基本的なペアレンティングスキルを持っています。実子とは生まれた時からの絆があるため、自分自身の家庭内では成功していたかもしれません。実子は自分の日課、考え、伝統と一緒に育ちます。そのため、実親向けに開発されたコモンセンスペアレンティングを使うことができます。里親にもペアレンティングの知識をつけてもらうために、コモンセンスペアレンティングのトレーニングから始めます。しかし、専門的な親として、それ以上のトレーニングが必要です。里子がやってくるとたくさんの問題に直面し、様々な経験をすることになります。私たちは里親に成功して欲しいのです。里親に責任のある役割を与える以上、

最も子どもの変化に影響を与える人物として、子どもが成功するために必要なトレーニングを提供しなければいけません。

里親トレーニング 16 セッション

里親トレーニングは16のセッションに分かれています。コモンセンスペアレンティングは、里親になりたいと私たちの元にやってくる人たちのコミットメントを評価するのに最適なツールです。里親は強い興味を示し、里親としての仕事をしたいと強く思うかもしれませんが、実際始めてみるとそこまで華やかで簡単な仕事ではありません。そのため、コモンセンスペアレンティングを6～7週間かけて受講する里親は、とても前向きでコミットしていると判断できます。

里親の役割：里親が自分の役割と責任、そして期待されていることを理解しているかを確認します。

マッチングの手順：これはとても重要です。正しく行わなければいけません。里親、スキル、子どものニーズのバランスを見て、最適なマッチングをしなければいけません。里親には、すぐに子どもが措置されない可能性があり、それは里親のせいではないと理解してもらわなければいけません。ただ、里親にぴったり合う子どもがまだいないということです。

里子と移行期：どのようなもので、どのように準備をするのか。子どもにとって新しい家や環境に行くことは大きな変化です。しっかりと準備をして欲しいと思います。同時に、里親にも移行期に起きる課題や出来事を理解し、準備をして欲しいです。

行動のABC：行動と何が行動を促すのかを理解します。子どもはトラウマを経験しています。家庭外措置の場合、行動に影響を与えるトラウマを経験し、それを私たちや里親は理解しなければいけません。子どもに何か問題があるわけではないのです。不自然な経験に対して、自然な反応をしています。それについて知っておきましょう。

アタッチメントと分離：子どもがどのような経験をするのかを里親が知っておくことが大切です。

ラポール形成、子どもの発達：子どもが発達段階に到達できるように手伝ってあげることです。

安全な環境作り：実子にしていた環境作りでは十分ではないかもしれません。追加の安全策を実行する必要が出てくるかもしれません。

グリーフ、喪失、トラウマ：施設から措置された子どもでもグリーフや喪失を経験します。そこが彼らの家だったのです。

社会スキル指導、動機付けシステム：子どもを動機づける方法、シール表や様々なツールを使います。

子どもの進捗状況の評価：里親になるには多くの情報が必要です。

成功への鍵 - 支援とスーパービジョン

里親にトレーニングを提供し、情報を伝えたら、彼らを支援しなければいけません。学んだ方法を使っているかを確認します。実際、たくさんの練習が必要です。いつもトレーニングは第一歩だと言いますが、トレーニングだけでは行動を変えることはできません。継続した支援が必要です。私自身も過去に素晴らしいトレーニングを受けて、モチベーションが上がり、仕事について前向きな気持ちでいました。しかし、次の日に実際の子どもたちを前にしたら、トレーニングで感じた素晴らしい気持ちが全部消えました。学んだ内容を実際の状況に取り入れ、危機に陥っている子どもに対応するためには、追加の支援が必要なのです。そのため、ファミリーコンサルタントは不可欠です。里親家庭の長期的な成功に欠かせない要素です。そして最終的には、子どもにとって良い結果をもたらすために必要です。里親にコンサルテーションと支援を提供します。そして、コンサルタントのことを支援するスーパーバイザーがいます。私たちのファミリーコンサルタントは7～9家族を支援し、その数は里親のスキルレベルによって異なります。もし、2～3家族が里親になったばかりの家族でしたら、すでに数年里親をやっている家族に比べて支援に時間がかかるので、一人が担当しないように割り振っていきます。コンサルタントが持つケースの仕事量を見て、バランスをとります。もし、2～3名の新しい里親がいれば、全体で7家族しか担当しないかもしれません。もし、多くの支援が必要な家族がいなければ、短期間9～10ケースを担当するかもしれません。うまくいっているかを確認するためのスーパービジョンです。スーパーバイザーは担当件数が多すぎないかを確認し、常に支援を提供し、スキルアップを目指しています。スーパービジョンの枠組みは全てのレベルのプログラムで適応されます。

里親は自分のリクエストや意見が届かないことが一番大変なところだと言います。しかし、しっかりとしたスーパービジョンの枠組みがあれば、こういうことは起こりません。だから、ユースビリティやボーイズタウン、他にボーイズタウンがサービスを提供してきたプログラムは成功してきました。スーパービジョンを通じたコミュニケーションがあるからです。日本の皆さんはこれから多くのことをしなければいけません。皆さんがここまでやってきたのと同じです。皆さんならきっと成し遂げられると信じています。

施設における CSP の取り組みと、里親支援に向けての今後の展望について

伊藤 二三男 社会福祉法人カリタスの園 児童養護施設竹の寮 総主任

私の施設、カリタスの園 竹の寮は、平成 27 年 5 月より、CSP を本格的に導入しました。非常に子どもたちが荒れた時期もありましたが、CSP における支援を行ったことで、少々の問題行動はあるものの、施設内もずいぶんと落ち着きました。基本社会スキルが身についたことはもちろんのこと、子どもたちの配慮、適応行動の増加に、非常に驚いています。

本日はシンポジストとして話をするわけですが、里親支援については、まだまだ十分なことはできていません。これまで施設で CSP に取り組んで来たことを中心に、そのことをどのように生かして、今後里親支援に活かしていくか、ということをお話させていただきます。

施設概要

社会福祉法人カリタスの園 竹の寮は「私の兄弟である、この最も小さなものの一人にしたのは、私にしてくれたことなのである」とのイエス・キリストの御言葉に基づき、カリタス、愛、優しさ、暖かさの実践により、ひとりひとりが大切にされる社会が実現されるために創設されました。昭和 10 年 9 月 29 日に設立し、今年の 9 月 29 日で、84 年目がスタートします。定員は 60 人で、今日現在 51 名の子どもが生活しています。施設形態は小舎制で、大きな建物の中に、7 ホームあり、1 ホームあたり 6～9 名で生活しています。ホームは同年齢に近い子たちのホームになっています。職員数は 40 名で、施設職員数は 32 名です。

竹の寮は、創立者の教えや、子どもたちが愛され、大切にされているという実感できる施設を目指しています。また、家庭的雰囲気大切に、子どもたちが夢に向かって前進できるように支援し、地域に開かれたホームとして、カリタス、愛の輪を地域にも広げながら、未来に向かってともに歩いていくことを掲げています。

CSP 導入前の支援について

私のことを少しお話しすると、私は 1 歳のときに、現在勤めていますカリタスの園 竹の寮の市内に併設されている乳児院に入所し、2 歳から竹の寮に措置変更し、高校 3 年生まで児童養護施設で育ってきました。当時は、男性職員が一人もいないなか、シスターや女性保育士が子どもたちの支援にあたっていました。幼児小学生のときには、楽しく過ごした記憶があります。しかし、中学生ぐらいから上下関係の厳しさなど

により施設での生活が一変しました。当時施設内に男性職員がいなかったことあるのですが、何かあるとシスターや女性保育士は、高校生に指導させる、といったことが多くありました。当然高校生の指導の多くは暴力によるものでした。そのようなことから、私は「これではいけない。自分は竹の寮の職員になろう。」と思ったことが動機となり、現在まで 32 年間勤務しています。

しかし、私が職員になってから、私が入所していた当時高校生がしていた指導を 15 年間ほどしてしまうこととなります。私が行ってきた支援は次のようなことでした。

竹の寮で勤務した当時の私の支援は、スポーツを通して、気力/体力の向上を図り、社会にでも負けない精神力を身につけさせることや、施設間で開催される各地の大会で勝つことで、これにより自己肯定感を養う支援をしてきたように思います。

常に口癖は、気合と根性。今思えば、若かったかなと思いますが、実際には、力による支援が展開されていました。

特に命令口調、それは間違っていると否定し、何も言えないようにする。何もかも禁止するなどして、問題者を出さない。その当時は良かったと思い、子どもたちもついてきてくれたかのようにみえた支援ですが、実は子どもの心には全く届いていませんでした。九州の養護施設では、男の子は野球、女の子はバレエを施設内で取り入れ、九州大会を目指している実情があります。もちろん竹の寮でも、学校から帰ってくると、毎日練習します。このようなことは、私が施設で生活しているころから当然のように行われて来ました。

30 年の勤務のなかで、17 年間野球の監督をしましたが、野球とバレエのどちらが先に九州チャンピオンになるかの競争を常にしていたことが思い出されます。実際にはバレエの方が早く九州のチャンピオンになりましたが、今思えば、練習においても、力による支援、命令、拒否、禁止、気合と根性を掲げ、ひとりよがりの練習を展開していたと思います。

私が竹の寮で勤務して 5 年間ほどは、男性職員は私一人でしたが、入職して 5 年ほどすると、男性職員も 2 人と増えてきました。職場の先輩である私からの、命令、否定、禁止の力による支援を展開していたので、当然後輩は、これでいいのだと、支援をしていました。

子どもになめられたり、言うことをきかせきれない職員はだめな職員、と言われる時代でしたので、男性・女性に関わらず、問題を起こしたら、大きな声で子どもを怒鳴り散らしていました。

しかし、施設内体罰や虐待が全国的に報道されると、国や県から体罰禁止の文書、施設内における体罰、虐待に関する研修や周知もあり、これまでの支援方法は全く使えなくなりました。

子どもたちも当然、体罰禁止や、虐待に関する知識が増え「先生たち、たたけんもんね」。強い言葉を使えば「言葉の暴力じゃ!」「夏休みにある児相の先生との面談で言うからね」とか、職員が他のこどもに危害を加えようとしている子どもを抑えると、「あ、暴力じゃ!」と連呼します。子どもたちは、職員の指示もきかずに荒れ、親が与えたルーターを施設に持ち込み、いつでもネットゲームをする。ルーターを取り上げようとすると、これは親がだしているんだから何が悪いのかと暴れる。集団で登校せずに起きてこない。集団で金髪に髪を染める・・・といった状態でした。

また、毎年子どもと職員に対して、体罰や虐待に関するアンケートが施設内でも実施され、職員はアンケートに書かかれることを非常に嫌がり、だめなことだめ、と言えないくらいになっていました。

支援方法がわからず、暴れば押さえる日々でした。また発達障害児や、被虐待児の入所の増加により、竹の寮の支援が行き詰っていました。問題が起きて指導すると、キレて暴れ、職員が何人もかかって押さえることしかできず、警察が介入することもありました。

そうこうしているうちに、子ども間の力による暴力が発生。平成17年5月、男子児童11名、平成26年7月、男子児童13名が関わる、力の支配による性問題が発覚しました。

このような支援の行き詰りから、竹の寮では、神戸少年のまちのペアレンティングプログラムに取り組むことになりました。

暴力をふるわないで子どもを育て、虐待を予防するという神戸少年のまちのペアレンティングプログラム研修の案内をみて、施設長と私と心理士の三名で、平成14年の2月に、神戸で行われた研修に出向きました。

その時の私にはペアレンティングプログラムの良さを知る事ができず、特に普段子どもが当たり前のようにできていることをとりあげて褒めることに納得が出来ませんでした。しかし現状から脱却するために、何かをしなればと思っていましたので、子どもたちには～くん、～さんをつけ、呼び捨てはしないということを実践していこうと提案し、全ホームの職員に～くん、

～さんの励行という張り紙をしました。心理士を中心に、トレーナーが園内研修するという形で職員会議やケース会議で行いましたが、実際の支援には生かされませんでした。

それから、面会室の椅子や壁紙をはぐ、玄関に置いてある植木鉢を投げる、集団で髪を染めて登校する、車にも植木鉢を投げる、職員室に入って書類を散乱させるなど、状況に変化はありませんでした。このような状況の中、心理士がCSPと出会い、2012年、竹の寮初の初級指導者が誕生しました。私は心理士に、なぜCSPなのですか?と質問すると「以前のペアレンティングプログラムには育み、期待値を学ぶことはありませんでした。児童養護施設において、個々の期待値の把握なしで支援することは、子どもと職員のいらいら感が増すばかりです。また、育み、スケール(SCALE)で大切な、愛され、受け入れられていることを子どもに示すことが、施設支援において、とても大切なことなのです。」と答えました。

それから施設では、平成26年度末までに、CSPの幼児版初級指導者13名が誕生しましたが、支援に生かされませんでした。心理士はCSPをつかって支援している心理治療施設、大阪のあゆみの丘の堀先生に相談し、支援にあたっては、使用者や教育方法を、詳細に記録しなければ、何も変わらないという助言をいただくも、多数の職員から、「書き物が増える」「書く時間がない」などの抵抗が大きく、何も変わらない状況が続きました。また、堀先生からは「管理職が取得しないと、絶対にうまくいかない。伊藤主任を巻き込むように」と心理士は助言を受けたようです。それからというもの、毎日のように心理士から「指導者の養成講座を受けてください」と廊下ですれ違うたびに私は言われました。しかし、これまで長年行ってきた指導方法を、簡単に変えることができるのか。新しい支援方法を私自身が受け入れることができるのかと考え、何かに理由をつけては受講を避けていたのです。しかし最終的には「CSP幼児版を受講しなさい」と施設長より言われ、仕方なく渋々受講し、平成27年の1月末に幼児版初級指導者を取得しました。

これで終わったと思っていたら、その3日後、あゆみの丘へ実習に行くための航空券と宿泊券を渡され、渋々、3名の職員と出向き、実習を行い、記録の仕方や、実際の子どもの声掛けについて、実際に学ぶことになりました。あゆみの丘は心理治療施設で、発達障害者が多数入所しているにもかかわらず、子どもたちは落ち着いており、職員からの指示もスムーズに入るなど、ここは本当に心理治療施設なのかと疑うほどでありました。この実習で得たものは多く、入職して間もない職員、ベテランの職員に至るまで、褒め方や、良い結果、悪い結果が統一されており、全職員が同じ結果を用いていました。

職員は誰一人として大きな声をあげることはありません。どの職員が指示をしても「はい」と言って子どもが行動します。そしてどんなに小さなことでも、普通にできることも、声にだして褒めまくっている状況を目の当たりにしました。

実習最終日の講義のあと「管理者が変われば施設も変わります。管理者が先頭に立ってやれば、他の職員もついてきます。管理職員だけが指導者の資格を取得してもだめで、施設全体で取り組まなければ、やっても無駄になります。職員が変われば子どもは絶対に変わりますから、とにかく3ヶ月やってみてください。変わりますから。」と言われ、施設を後にしました。

全てを真似ることはできないけれど、まずは私が先頭に立ち、心理士と連携しながら、必ず竹の寮の支援の仕方を変えるのだ、と強く思い、宮崎に帰りました。

CSPは子どもの最善の利益のため、法人の理念である、ひとりひとりを大切にされた支援確立のため、CSPを用いることを全職員に確認を行いました。生活支援においてのこと、その他にも、朝会、昼会をなぜ行うのか等、それぞれの目的を明確にし、全職員で確認・共有し、本格的に取り組むことになりました。

まず管理職を含めたCSP委員会を立ち上げ、ステップ短冊の導入を行いました。たくさんの幼児版初級指導者がいるにもかかわらず、全く支援に生かされていない原因の一つが「記録」でした。半ば強制的に「私が記録をします」と全職員に指示しました。すぐにすべての教育法のステップが書かれている短冊を、業者に頼んで印刷、各ホームに配布し、平成27年5月1日より短冊の記入が始まりました。

これが実際記入したものです。

効果的なほめ方

承認：○○さん

適応行動：テーブルにおいてある袋を片付けてくださいね、と伝えたらすぐに片付けたね。

理由：直ぐに行動できる人は信頼されてできることが増えます

良い結果：ナイス○○さん！1ポイント！

問題行動を正す教育法

問題行動：コンタクトをティッシュの上に置いていて、割ったと聞きました。

悪い結果：園長先生にお詫びに行ってください。

適応行動：高価なもの、高いものは特に大切に扱ってほしいです。練習はしてません。

問題行動については適応行動が、子どもには伝わらない内容になっています。現在であれば「コンタクトはコンタクトケースの中に入れて、机において保管します」と記入するところですが、スタートした当初はこのような短冊がたくさんありました。

2番目に、朝会、昼会を実施しています。朝会では、子どもに対してどの教育方法を用いて支援を行ったかの報告します。昼会では、遅出の出勤者を中心に、全教育法を、全職員が、土日を除く毎日交代でセッションとスキル練習を行い、上級指導者や管理者がそのセッションをフィードバックするというスタイルで、朝会、昼会を毎日実施しています。

3つめは、結果の統一です。以前はホームによって結果が異なっていました。そこでベテランも新人の職員も、同じ結果を使えるように、結果の統一を行いました。

竹の寮では、6時にオルゴールの音楽が流れます。この音楽が流れて、自分で起きた場合、2ポイント。その後、職員の声掛けで起きると1ポイントもらえます。この社会スキルは、時間を守ることと、指示に従うことです。点呼に遅れた場合は、30分早寝になります。ただし、「今日遅れたから30分早寝です」と言ったことに関して、「うん、わかった」と言ったら、バックアップで15分になる。と子どもたちに説明をしました。

重要な6つの社会スキルを全ホームに掲示し、この中からその子が出来ていないことをターゲットスキルに入れることをはじめました。

高校生には「なめてる」「ばかじゃねえか」と言われることを心配し、やめておくか、と言っていたのですが、高校生たちから「なぜ私達はできないんですか」と言われ、今は幼児から高校生まですべて行っています。

次にご紹介するのは、1週間での教育法をどのくらい使ったのか、ホームごと、施設全体のグラフにしたものです。

青が効果的なほめ方、オレンジが予防的教育法、グレーが問題行動を正す教育法です。

毎日、施設全体で1000から1200ほどの教育法をつかった支援が行われています。充足率も13回褒めて1回正す、というような比率になっています。

このグラフが、毎週全ホームに配られ、ホームに対するフィードバックのひとつとして用いられています。

これが、子ども個人のグラフになります。

どの子どもにどの教育法を月に何回行ったのか、という内容です。

下の方には今月のターゲットスキル「許しを得る」と書かれています。その練習の内容などを個人でグラフにして、毎月振り返りを行っています。

それでは次に、子どもたち、職員がどのように変わったのかをアンケートでみてみたいと思います。

平成 27 年度のアンケート

「短冊、朝会、昼会、ポイントカードを導入しておりますが、子どもたちの変化はみられましたか？」という質問に対して、下記のような回答がありました。

- 人に対する配慮が多くみられるようになった。
- 声かけ、児童からの「仕事お疲れ様です！」という言葉に心癒されることも多くなった
- 子どもたちに声かけする時、職員の統一した声掛けになるので、子どもたちの受け入れがスムーズになった。問題行動があった時に、悪い結果とか、タイムアウト、離れる、等の今までになかった統一した声掛けをすることで、長引くことも少なくなり、いま落ち着いた生活ができていると思う。
- 子どもの挑発的な態度に対しても、適した対応ができることが多くなったので、トラブルも少なくなり、職員同士の会話でも、指導の説明など、スムーズでわかりやすくなったと思う。

アンケートからもわかる通り、子ども、職員共に CSP に助けられ、私自身もいろいろな面で変わることができました。「助けられる側から、助ける側に施設がならなければ」と考えるようになり、以下のようなことを平成 28 年度より行ってきました。

- 宮崎県内の CSP を今後取り入れていきたい施設へのプログラム紹介、九州内の取り入れたい施設へのフォローアップ
- 入所中の親御さんへの CSP 講座
- 現役里親さん、新規の里親候補の方への CSP 講座

平成 28 年度から 29 年度にかけて、現役の里親さんへ CSP 講座を実施しました。里親さんからの最終日のアンケートでは、「褒めることの大切さに気づく事ができました。CSP との出会いに感謝しています」「まず、意識することが増えたこと。褒めることや予防教育法など、一番わたしにとっての効果です。子どものうまい、上手な環境を持続するためにも、おおいに大切なことだと思います。まだまだ一割もわかっていないもので、これからも多くの研修に参加したいです」などの感想があがりました。

今年度からは、里親育児プランニングとして、子どもとのマッチングから CSP 講座を実施しています。概

要としては、CSP セッション 1～7 を講義し、委託後も困り感や問題行動があった場合、CSP 育児プランを用いて、適応行動を増やししながら、アフターケアを行っています。

今後の里親支援に向けた展望のひとつは「里親委託後の CSP による継続支援」です。

施設で CSP の支援をしてきましたので、委託後も継続していただけるよう、また里親さんとの良好な関係を構築し、いつでも頼れるような施設になることを今後目指したいです。

そしてふたつめは、困り感や問題行動が里親委託後あった場合、CSP 育児プランを用いて、適応行動を増やししながら、支援をしていきたいと思っています。

また発達障害等のある子どもに対応できる里親さんの開拓も行っていきたいと考えています。

宮崎においては、里親の登録数は少しずつ伸びてはきているものの、委託数となると横ばいで推移しています。特に特性の強い子どもの委託にはつながっていないのが現状です。現役の里親さんへ CSP 講座を実施している中でも、特性が強い子どもはできない、という声をききます。

竹の寮でも CSP を取り入れる前は、支援が困難でした。しかし、子どもが到達している発達段階を知り、子どもに適切な期待をすることで、職員や子ども共にいら感減少したことも事実です。

これまで、施設の CSP 支援で培った経験を基に、施設全体のスキルアップを図りながら、今後の里親支援にあたっていききたいと思います。

最後に、本格的に取り組んできた CSP をはじめ、堀先生やエンパワメント宮崎など、多くの方々にご支援いただきながら、施設を立ち直らせることができました。

また、私自身も今年の 5 月に管理者の卵として、第一歩を踏み出しました。

これからは、助けられる側から助ける側にシフトチェンジし、一人でも多くの子どもたちや、他の施設、里親さんを助けられるようにしていきたいと思っています。



グループホームを支える仕組み

菊池愛 社会福祉法人麦の子会 ジャンプレッツ サービス管理責任者
尾崎尚美 社会福祉法人麦の子会 ホワイトハウス 世話人

菊池：

私は社会福祉法人麦の子会のデイアクティビティセンター・ジャンプレッツ（以下、ジャンプレッツ）でサービス管理責任者とマネージャーをしております菊池愛です。マネージャーとして私がグループホーム職員とスーパービジョンを行い、業務についてもアドバイスをしています。

尾崎：

同じく麦の子会でグループホームの世話人をしていません尾崎尚美です。今日は、グループホームを支える仕組みについてお話させていただきます。

社会福祉法人麦の子会のグループホームは、現在10箇所あります。そのうちのひとつに、オリーブという定員5名の女性ホームがあります。そこには、世話人が1名、支援員が2名で暮らしの支援を行っています。グループホームの職員は、トレーニングセンターの職員からCSPのトレーニングを受けています。またジャンプレッツと、グループホームとは、毎日連絡ノートでコミュニケーションをとっています。そしてサポートセンターからの観察やコンサルテーションで、堀先生からの助言も頂いています。

それでは、グループホームについて説明させていただきます。

現在このグループホームは、北海道札幌市東区に10箇所あります。そこでは52名の利用者さんが生活しています。さらにサテライトとして、4名の利用者さんがアパートで生活しています。障害の程度は、強度行動障害の方から一般就労をしている方もいらっしゃいます。半径1km以内に、グループホーム、アパート、通所施設、サポートセンターがあり、四角で囲っているところが今日お話しさせていただくグループホーム・オリーブ（以下、オリーブ）になります。

このオリーブで、Kさんの支援を通して見えてきたものをお伝えしたいと思います。Kさんは3歳で自閉症と診断を受け、麦の子会に通い始め、16歳からグループホームでの生活を送っています。お母さんからの聞き取りによりますと、Kさんの幼児期には、お母さんがイライラした時などは、暴言、暴力、ネグレクトなどがあったといいます。そのため、CSP幼児期や学齢期で用いる「SCALE（スケール）」を大切にしつつ、子育て経験の幅を広めるための支援を行ってきました。しかし虐待による二次障害の攻撃性が時折みられました。現在Kさんは22歳で、日中はジャンプレッツに通所しています。3年前、Kさんが19歳の

頃ですが、その頃から二次障害が顕在化し、つばを吐く、椅子の上から衝動的に飛び降りる、また他者への突き飛ばし、自分の顎や額を強くこするなどの自傷行為が増えてきました。他者を突き飛ばすとか、蹴飛ばすという行為があったため、職員が一对一で対応しなければ、Kさん本人や周りの安全を守ることができませんでした。ジャンプレッツでは、移動時や外出時には、職員が左右につき、周囲にも「Kさん通ります」と事前に伝えてから移動することも行っていました。グループホームでは、リビングの椅子を倒す行為や、人の部屋に入りものを落とす行為などが多く見られ、職員に気持ちを伝えたいときには、呼び方がわからず肩を強く叩いたり、頬を平手打ちして気持ちを伝えていました。グループホームでの睡眠時間がとても短く、2～3時間しか眠れない日が続くなど、私達のKさんへの初期対応がうまくいかず、他害や自傷が続いてしまうという悪循環を招いていました。

菊池：

Kさんに対するジャンプレッツの支援をご紹介します。私達はCSPを学び、問題行動に焦点を当てるのではなく、活動に参加できたことや、落ち着いて食事ができていることなどの適応行動に注目し、肯定的に関わるために記録を細かく行いました。他害があった場合は「落ち着くために医務室に移動する」ことを予防的教育法で練習し、謝ることを伝えました。最初は「悪い結果」に謝罪を用いていましたが、職員と会話ができることで「良い結果」になってしまい、笑いながら謝るなどがみられたため、集団ではなく、個別活動を多くしました。行動の切替時に他害があるので、スケジュールの見通しを持たせるために、ガーデニング作業を毎日取り組み、2対1で対応しました。

コンサルテーションでは、本人がガーデニングのときに表情が良かった、というアセスメントがあり、適応行動を増やしていくために本人に同意をとり、花の水やりを仕事にしました。

堀先生のスーパーバイズで「適応行動を増やし、褒める場面を増やすために、人の役に立ち、感謝されることが大切」と提案をいただき、花の水やりを毎日行いました。

そして、かかりつけの病院とも連携し、処方されている薬を変えることで、睡眠時間も確保できるようになりました。

連絡ノートをつくり、ジャンプレッツとグループホー

ムで活用することで、24時間「充足率」「関わり」「比率」「褒め率」を高めるため支援を行っていきましました。

ジャンプレッツとグループホームで活用している連絡ノートをご紹介します。

まず私達は褒めることができた箇所をチェックすることから始めました。

Kさんは花の水やりをすることで、職員がとても喜んでくれたことをきっかけに、適応行動が増え、たくさんの人に褒められるようになりました。適応行動が増えたことで、スタッフがすでにできていることにも目を向けるようになり、肯定的な関わり、効果的な褒め方の教育回数が増えました。

しかし当時は、グループホームとジャンプレッツで共通にアセスメントを行っていなかったため、支援方法が統一されておらず、教育法のステップ通りに記録が行われていませんでした。また関わりも数値化されていなかったため、関わりの回数や予防、褒めた回数、問題行動の回数が明確に記録できていませんでした。

菊池：

そこでジャンプレッツとグループホームとの新しい取り組みとして、合同でアセスメントや教育法を24時間共通化し、予防時間、褒める時間を、連絡ノートをつくることで明確化しました。グループホームの毎日の会議では、管理者が中心となり、充足率、関わる量を数値化し、褒める回数が足りているかを確認し、スキル練習に取り組んでいます。予防的教育法、問題行動を正す教育法、自分をコントロールする教育法がステップ通りに行われているかなどの記録も確認します。花の水やりでは、職員がどこにいてもKさんを一斉に褒めるということをしています。

共通のターゲットスキルを決め、予防的教育法を用いて毎日練習し、Kさんができると職員全員で褒めています。

社会スキルを明確化して指示に従うということが中心になりますが、このように職員も意識して社会スキルを使っています。

次にみていただくのが一日の平均問題行動の年間推移です。3年前の2016年度は麦の子会としてはCSPに取り組んでいましたが、グループホームでは支援の統一がされておらず、問題行動が多くみられています。

ターゲットスキルもなく、ステップも曖昧なまま効果的な褒め方を用いていました。

そして2017年からはステップを意識するために、毎日の朝の打ち合わせなどで、スキル練習を問入れ、支援の統一を行い後半の12月頃から、堀先生のコンサルテーションを受けています。本格的にCSPを意識して取り組んでいった結果、徐々に問題行動も減ってきています。

2018年、今年度の4～8月の平均になります。今回の発表のような取り組みを続けている結果、問題行動が劇的に減っています。次に1日の教育法の回数の年度推移を御覧ください。2016年度は、効果的な褒め方が少なく、予防的教育法は全くされていませんでした。今年度は、効果的な褒め方を増やすだけでなく、他の教育法も適切に用いています。

菊池：

Kさんの現状です。新連絡ノートを始めてから、他害が減りはじめ、2週間で他害がなくなりました。人を呼ぶ際には、一の力で肩を触ることを決め、予防的教育法を行い、効果的に褒めることで気持ちを伝えることができるようになりました。移動のときや、ソファに座っている時、周囲を眺め、穏やかに過ごし、好きなテレビをみたり、他の入居者の会話を楽しむなど、落ち着いている時間が増えてきました。

ジャンプレッツの集団活動に参加し、仲間と楽しみを共感し、歯をだして笑うことも多くなりました。職員が気持ちを代弁するとうなずき、本人の動作を気持ちで伝えてくれるようになりました。実際にお手洗いにいく際は、一の力で肩を触り、職員が代弁することで一緒に移動することができるようになりました。

トレーニングやサポートセンター、コンサルテーションによるサポートによって支援が共有化されました。グループホームとジャンプレッツで教育法を統一させたことで、行動に改善がみられました。花の水やりを行い、適応行動を増やすことで、コミュニケーションを取る時間と褒める回数が増えました。

毎回管理者がスキル練習を行うことで、ステップを意識して教育法を使えるようになりました。連絡ノートによって、行動に焦点をあて、関わりがより明確化して、教育法を使う回数が増えました。このようにCSPを用いて連携して支援を行うことによって、利用者さんひとりひとりの生活が豊かになるように支援を続けていきたいです。

質疑応答

「外から落ち着いているとか、水やりが適しているとか、そういったお話がありました。本人の言葉や態度を通じて「自分にとってすごく楽しい」のように、本人の中から出てくる感情としてわかるものはありましたか？」

尾崎：

以前は何かを言うと眉間にシワを寄せて、表情がガッって感じだったのですが、食事の前後4～5時間程度ですが、みんなの会話を微笑むように見ることが多くなりました。「水やり行くか」と言うと、にこにこ写真にあるように、笑っています。その表情を見ていると、指示に従うことや、すぐに行動するという楽しんでいるのではないかと感じています。

「Kさんにとって良い結果、悪い結果、特に良い結果、その動機づけをする良い結果は何に使われているのかということと、良い結果を選ばれた基準は何だったのかということをお教えいただけますか？」

尾崎：

Kさんにとって、一番の良い結果は「一斉に褒める」ことだと思います。他に「何を作業していても褒める」というものもあります。またグミなどを食べるのが好きなので、「すごいね！」と言ってグミをひとつ渡すというものもあります。

「私もいま施設でCSPの勉強をしているのですが、問題行動がとても多いです。先ほどの話の中で、2017年から問題行動が減ってきたとお話をいただきましたが、どのような適応行動が、どのように増えてきたのでしょうか？」

尾崎：

先程のノートの効果が大きかったのですが、問題行動が多かった原因は、予防教育をしていなかったことだと思います。予防教育をステップに沿って行いました。例えばKさんがトイレに行きたいと言ったあと、他のことに気がいってしまい、すぐに行動を起こすことができませんでした。そこでトイレに行く前「トイレに行くときは、いい？って言ってから、真っ直ぐトイレに行くよ。そしてトイレに入ったら静かに座ろうね。」と声掛けをし、練習しました。最初はなかなかいけなかったのですが、今ではすぐに行動に移すということが出来るようになりました。



里親を育て里子を守る力

松山 泰雄 「やっくんと子育て楽しもう会」代表、養育里親、
天理教基充分教会 代表役員（会長）

1) 里親としての歩み 挫折と出会い

滋賀県の野洲市で養育里親をしております、松山と言います。私は里親ですので、「里親支援」というテーマについて、里親目線で話を進めさせていただきたいと思います。

では、自己紹介を兼ねて、私のこれまでの歩みから、お話を始めさせていただきます。個人が尊重され、個人情報保護が進む現代社会で、家庭というプライベート空間は、ますますブラックボックスとなっています。そんな家庭を開放して、里子を家族として迎えるのが「里親」です。とても意義ある活動だと思いました。14年前、何か社会貢献がしたいと考えていた頃だったので、すぐに里親登録をしました。

当時、中学生から幼稚園まで、4人の実子の子育て中でありました。その中に里子を迎えました。ところが、2年が経過した頃から、子どもたちの不適応行動にイライラする日が増え、4年目を迎えた頃には、トラブルが頻発し、里子にとどまらず、実子も荒れる日が出てきました。私は里親をしている喜びを感じられなくなり、子育てに対する自信を徐々に失っていききました。ほどなく里子は措置解除となって、実親のもとに帰っていききました。

そんな頃、ボーイズタウンのCSPに出会いました。その時の衝撃は忘れられません。子どもの発達を踏まえて『適切な期待値』を持っていますか。普段からたっぷり『育みの行動』で接していますか。具体的な行動を『見せて話す』で伝えることができますか。良い行動を増やし、良くない行動を減らせるように、『良い結果・悪い結果』を用いていますか。子どもが良い行動をした瞬間を見逃さないで、『効果的なほめ方』ができていますか。失敗を減らし、適応行動を増やすために、前もって『予防的教育法』で教えていますか。問題行動には、必ず替わりの適応行動を『問題行動を正す教育法』で教えていますか。子どもが自ら落ち着くことができるように『自分をコントロールする教育法』で教えていますか。CSPのプログラムは、私の子育ての何が良くて、何が不足しているのかを、明確に、そして詳細に教えてくれました。それから私は、研修を重ね、自身のスキルアップにつとめることになりました。

私の里親としての当初の歩みは、順調とは言えませんでしたが、しかし、紆余曲折があったお陰で、ボーイズ

タウンのプログラムに向き合うことができ、私は再び里子を受け入れて、現在、里親としての喜びを味わっています。

2) 里親の現状 改正される枠組みの中で

ご承知の通り、里親を取り巻く制度や枠組みは、近年大きく改正されてきました。最近では一昨年（平成28年）、児童福祉法が改正されたのを受けて、昨年（平成29年）には、その理念を具体化するために「新しい社会的養育ビジョン」が発表されました。その中では、第一義に家族再統合の重要性が明記され、同時に里親には、家族に変わる代替養育の担い手として、いよいよ期待がかかっています。

日本財団でも、この流れを受けて、昨年11月、全国の20代～60代の男女を対象に、里親の意向および認識についてインターネット調査が実施されました。その結果、「里親になってみたい」「どちらかという故里親になってみたい」との回答が、全体の6.3%という結果が出て、全国で換算すると実に、約100万世帯が潜在的な里親候補者であると推計できるということです。とても期待の持てる数字です。しかし、潜在的な里親志願者が、現実に里親登録に一步踏み出すのかどうか。ここが一番重要なのは言うまでもありません。

平成27年に厚労省が行った調査では、里親及びファミリーホームへの委託児童の割合が全国平均15.8%に対して、私のふるさと、滋賀県は33.3%と全国トップレベルでした。滋賀県在住の里親として、この結果は大変うれしく思いました。しかし、そんな滋賀県で、里親の里子に対する虐待事件が朝刊の一面に掲載されたことがあります。事件の詳細については余談を許しませんが、結果として不起訴となりました。当事者の里親さんや、その関係者から話を聞く機会がありましたが、里親がいかに孤立していて、いざと言う時には誰も守ってくれない、とても弱い存在なのだと思い知らされました。もちろんこれは、里親目線による事件の側面ですが、この時に、多くの潜在的里親候補者を失ったことは間違いないと思います。そして、こうした事は、滋賀県だけに起こる問題で無い事もご理解いただけたと思います。

里親は、制度や枠組みが変化する中で、求められる期待値はどんどん上がってきております。しかし、里親の置かれている現状を考えると、里親としての質を高

める枠組みは制度化されていませんし、里親自身のモチベーション維持のための支援は無いに等しいと思います。つまりそれは、守られない、孤立した状態だと言えます。もちろん、訪問面談や、レスパイト・ケアなどの個別支援もありますが、もっと里親一人ひとりに寄り添い、養育の質を高められるよう、個性に応じた支援はできないものでしょうか。

そんな支援ができて、里親の養育スキルが向上すれば、不調を予防する力も備えることができるでしょうし、あってはならない事件の発生リスクを大幅に減らせる効果もあるのではないのでしょうか。そうなると、里親への世間の期待も高まり、魅力ある職業として評価され、潜在的里親候補者の中から、一步踏み出して里親登録する方が増えてくるのではないかと考えます。

3) CSPに育てられた里親 質を高めるプログラム

さて、もう一度私自身の事を振り返って考えてみると、里親を始めた頃の私は、預かった里子が、怪我なく事故もなく、安心して暮らしてくれればそれでよいと思っていました。改めて自分の養育の質を振り返ったり、専門性を考えたり、といった事は一度もありませんでした。逆に、実子を育てた知識や、経験だけを根拠に、「自分のやり方で育てるんだ」という、第三者から評価できない既成概念で固まっていたように思います。でも、里親の養育は、個人的な既成概念だけでは対応できないことは、専門職の方ならご承知の通りです。

私の場合、幸いにCSPとの出会いで、養育者としての学びを進めることができました。学び始めた頃は、自分のこれまでの、養育に対する考えや取り組み方を、一度リセットすることが必要でした。既成の考えは、時としてCSPのスキルや教育法が素直に実行できない原因となります。スキルが身に付かないと、プログラムの効果が実感できません。そのため、理解するか、納得するという事は後回しにして、とにかくプログラム通りに練習する必要性がありました。しかし、自分に染み付いた考え方、子どもとの接し方や、問題行動への関わり方は、なかなか簡単には修正できません。

でも、ご周知の通り、CSPは徹底的にスキル練習を行う事に重点が置かれています。しかも、そのスキル練習は、セットアップからフィードバックに至るまで、最も効果的に行うことができ、身に付けられるように組み立てられています。

おかげで、私は、研修の場に足を運ぶだけで、固定概念をリセットして、練習を重ねることができました。

我が家の里子、Y君の話ですが、このプログラムの効果を実感する嬉しい出来事がありました。2年生の3学期、「命の学習」での出来事です。「命の学習」は、生まれた時から今までの成育歴を振り返り、自分がい

かに愛情を受けて育てられたかを学ぶ生活科の授業で、学校によって違うようですが17時間ほどありました。4歳で我が家に来た彼にとって、それ以前の事は、記憶が無いが、あったとしても思い出したくない過去です。そんな話題が飛び交う教室で、周りの友達と意識を共有しなければならない。彼にとって、どれだけ残酷な時間だったろうと思います。しかも、その「命の学習」期間中に、親権者の勝手な事情から、Y君の姓名、苗字が変わりました。

私は、この状況に彼が耐えられるのか、随分心配しました。毎日、彼の表情に注視して、心の変化を見逃さないように細心の注意を払いました。そして、何をおいても、CSPで学んだ育みの対応を心がけ、通学のモチベーションが下がらないように配慮しました。その「命の授業」の最後に、「お父さん、お母さんへ」として、渡してくれた手紙を紹介します。

「ぼくのために、忙しいのに、お手紙を書いてくれてありがとう。お父さん、お母さんの家に来させてくれて、ぼくは嬉しいです。これからは毎日、笑顔でいられるように、ことばづかいに気をつけます。何でもお手つだいするから言ってください。 Yより」

それからのY君は、何かが吹っ切れたようでした。それまでは、どちらかというと消極的で、なかなか素直に感情を表現できなかった彼が、まるで生まれ変わったかの如く、明るく積極的になったのです。私も、担任の先生もびっくりしました。もし、私にCSPの学びがなかったら、この状況の中にいる彼を支える事ができたでしょうか。じっくりと効果的に褒めながら育てることができたから、彼は現実につぶされることなく、前向きに受け止めて、乗り越えてくれたのだと確信しています。

4) 里親を育て里子を守る力 SVの必要性

今年の6月から一ヶ月に一度、堀先生のSV、スーパーバイズを受けています。初めてのSVで、堀先生から、「ようやくスタートに立てましたね。」と言われました。「え？」 私は、CSPのスキルも使えるようになって、順調に養育できていると思っていたので、少し心外でした。

私に与えられた課題は、社会スキルを教える仕組みを里親家庭の中に作ることです。具体的には、先ず、里子との生活の中で、その子の問題行動を抽出します。そして、それに対応する適応行動を明確にして、その行動に適合したターゲットスキルを選びます。これを教えることを目標に、具体的に何を教えたか記録を取り、1週間から1ヶ月ごとにFBを受ける、というものです。

この方法でもっとも大切なのは、教育法の充足率や比

率を振り返る事です。充足率と言うのはCSPの教育法に、一日に何回取り組めたかを見ます。だいたい一日に10回から15回が目安となります。また比率は、「褒める」と「正す」の割合です。幼児期で8:1、学齢期は4:1が目安となります。この充足率と比率を見ると、養育の状態が数値化され、FBを受ける時の重要なデータとなります。

これがSVで提供を受けた教育法の記録用紙です。何時頃、何をしている時に、どの教育法を使って、何の社会スキルを教え、結果は何を用いたか。そんな記録をとっていきます。

さっそく持ち帰って始めることにしました。しかし、これが実際に行うのはなかなか難しいことに直ぐに気付きました。第一に、ターゲットスキルを決めるには、家庭内の一貫性を保つために、家内と話合う必要があります。でも、私は家内と話合う勇気がありません。決して夫婦の仲が悪いわけではありませんが、恐いのです。この点について堀先生は、「では、練習しましょう。オジジの香川さんを奥さんだと思って、話しかけてみて下さい。」と仰ったのです。やっぱり練習が大切ですね。お陰で、その翌日に夫婦で歩み寄って話し合い、問題行動を整理することに成功しました。

第二に難しいのは、記録を付ける事です。この用紙はA4なのでバインダーに挟んで持ち歩くわけですが、日常生活の中に常時携帯するのは、なかなか至難の業です。しかも、色んな事に追われている時などは、記録するのをしつつ忘れて、気が付くとあっという間に数日が過ぎ去っています。これではいかんと、簡単に持ち歩ける形にする必要があると思い、A5のリフィル形式に、自分流に、あれこれ作り直すことにしました。

まず「スキルワーク記録表」です。子どもの問題行動を書き留めて、必要な代替行動に展開し、適応する社会スキルを導きだして、ターゲットスキルを決めるのに使います。そして「社会スキルの練習記録」。毎日一回、社会スキルの練習を行って記録します。毎日、帰宅後に宿題と明日の用意を済ませてから取り組みます。休日は、お風呂の中で遊びながらやったりします。そして「教育法記録表」です。生活の中で、子どもに行った教育法を記録します。SVで提供されたものを、コンパクトにしたものです。最後に「サイン帳」です。これは、良い結果に用いるサインを記録していくもので、子どもにも同じものを持たせます。

最近、こうした形にようやく落ち着いて、使い出すことに成功しました。Y君にとって、サイン帳は、自分の努力が「見える化」されることで、モチベーション維持にかなり効果があります。サイン5個で、ゲームで遊ぶ時間の5分延長の権利がもらえます。下の方に、100個貯まったら、お小遣い100円プラス、5千個貯まるとゲームソフト、1万個貯まると任天堂ス

イッチをゲット、と書いてあります。俄然やる気の出る大きな目標も設定しています。でも意外にヒットしているのは、毎日の社会スキルの練習です。嫌がるかなと思ったのですが、案ずるより産むが易しで、逆に喜んで取り組んでくれて、あっという間に覚えて、びっくりしています。本当に楽しい時間になっています。

ようやく記録を付けられるようになって間が無いので、FBを受けるに至っておりませんが、目に見えてターゲットスキルが強化されて、問題行動は見る見る改善されてきています。例えば、今週のターゲットスキルに「アドバイスを受け入れる」があります。元の問題行動は、食事中の姿勢が悪い、身体をくねくねする習慣を無くそうというものでした。でも、2,3回、社会スキルの練習の時にアドバイスただけで、自分から気を付けるようになり、かなり改善しました。今では、自分からお箸の持ち方を練習するようになりました。

SVを受ける前の私は、里子との関係が良好なだけで、自己満足して喜んでいました。しかしその状態は、決して養育者として充分とは言えません。子どもに必要な援助に取り組みおらず、養育者としては、まだまだスタート地点なのだ、と教えられました。私は、気持ちが引き締まりました。同時に、SVによって、養育者としての専門性を支援されていることを実感しました。

5) 里親の支援は二つの柱 プログラムとSV

改めて厚労省の「新しい社会的養育ビジョン」を見てみると、子どもを委託した後の支援について、次のような記述があります。「里親の特徴を踏まえた支援が特に重要であり、原則として子ども担当の児童福祉司ではなく、個々の里親を担当するソーシャルワーカーが担うべきである（里親へのスーパーバイジングソーシャルワーカー）。また、委託後の研修についても、里親養育の質を高めるプログラムの開発が求められる。」この記述には、まさに里親が求める支援が、そのまま明記されています。それは、「里親へのスーパーバイジング」と、「里親養育の質を高めるプログラム」の二つです。

まず「里親へのスーパーバイジング」。里親は、定期的なSVを受けて、自らの養育を振り返り、質を高めるための助言を得ることで、専門性を高める必要があります。そして、「里親養育の質を高めるプログラム」。このプログラムは、何かあった時、一時的に効果を発揮するようなものではなく、養育全体に、体系的に、継続的に機能するものでなければならないと思います。

最後に、この文章には「児童福祉士ではなくて、ソーシャルワーカー担うべき」だとあります。それは、里

親の支援は、里子よりも里親に焦点を合わせるべきで、里親を育てることができれば、里子も守られるという意味でしょう。

でも里親は、私がそうであったように、既成概念で固

まっている場合が多いので、案外里子よりも扱い難く、手を煩わせるかもしれません。里親支援に向き合って頂く皆様には、どうぞ大きな愛と、寛容の心で、里親を育み、育てて頂きたい。そうお願い申し上げて、終わらせて頂きます。



**パネルディスカッション
(東京・大阪)**

パネルディスカッション（大阪）

堀：

今日の発表を通して、大きく分けて6つのポイントがありました。1つめのポイントは、リクルート。どのように良質な里親さんとパートナーシップを組んでいくのか。2つめは、トレーニング。里親さんを教えていかないと成功しません。3つ目は、マッチング。4つめは、実際インケアの中で起こる様々な問題をどうクリアしていくのか。5つめは、家庭を提供する中で危機的な場面も実際に起きることがあるということ。最後に、そういったことを総括するスーパービジョンをどのように成功させていくのかということ。時間が有る限り、テーマ別にご意見を聞きながらおこたえをきくという風にすすめていきたいと思えます。1つめ、リクルートに関してです。様々なイベントや地域の活動、単発ではなく継続的にコミュニティと関わっていくことがリクルートの成功の秘訣だとお話を伺いましたが、フロアの方からリクルートや取り組みに関する質問があれば、お聞かせください。

フロア：

もともと児童相談所で児童福祉士をしておりました久保と申します。リクルートについて2点お伺いしたいことがあります。1点目は、アメリカの里親さんというのは、職業ベースとして考えていいものなのか、もしくはボランティアベースなのか。日本の場合、子どもを育てる費用は支給されますが、ボランティアベースの考え方が強いように思います。今後、専門職として見ていく中で、どちらの道をいくのが良いのだろうかということを考えています。2点目は、リクルートする対象ですが、日本では里親を試みたいと思われる一軍の方々は、不妊治療の末、もう45歳を超えて、50歳くらいになってからという方も結構いらっしゃいます。アメリカではどのような年代や職業の方なのでしょう。共働きはダメなのでしょう。年収、お家の広さ、ベースのものがあるのかについてお教えいただければと思います。

堀：

ケイシーさん、お願いします。

ケイシー：

前半の質問、ボランティアか専門職かについてまずお答えします。リクルートという観点では、ボランティアベースです。こちらからまずは情報を提示し、里親のニーズについて伝えます。先ほどのステフの話にあったように、我々の期待値や里親トレーニングを受けることにコミットするという観点では、親を専門職として扱っています。関心のある方の質問にはできる限り答えて、必要な情報を提供し、私たちの連絡先を渡せるようにしています。多くの場合、その場において、対面でのやりとりをすることが重要です。「里親に興

味がある人はこの番号に連絡してください」と必要な情報を文面で提示することはできますが、対人関係は構築されません。どこかのイベントに参加して、誰かが話しかけてくれば、私の仕事に対する情熱や里親の重要性について直接伝えることができます。そうすると、自分もその一員になりたいと感じる人が出てきます。

後半の質問ですが、私の施設に所属している里親さんは比較的若い方が多いです。以前施設内の統計を見たときには、30代半ばの里親さんで実子がいる人たちが多くいました。ほとんどの夫婦は最低でもどちらかが働いていますが、中には必ずどちらかが家に居られるよう2人ともパートをしている夫婦もいました。家の外で仕事をしている里親さんでも、上手にバランスを取っていました。自宅で自営業をしている家族がいますが、そこは私たちの団体の中でも素晴らしい里親家庭の一つです。私はケンタッキー州のルイビルという大きい都市で働いているので、少し状況が違います。ケンタッキー州はほとんどが農地なので、畑を持っている里親さんもいます。幅広いですが、平均的には最低1人実子がいる30代半ばの夫婦です。

久山：

私がいるオレンジカウンティは、里親の平均年齢が高いです。子どもが家を出て自分の子育てが一段落し、まだ余力があるので、里親になってみようかという方です。経済的な問題で里親になろうという考えが全くないので有力です。ですから、オレンジカウンティには非常に裕福な方が多く、経済的にも余裕があります。ただ大事なことは、この人達がどうして里親になろうかと考えたかという動機です。オレンジカウンティの場合、だいたい7-8割の方が教会や所属するコミュニティ内の同年代のお友達から里親としての体験談を聞いたり、実際に家庭に行ってみたりすることがきっかけになります。それだったら自分もやってみようか、というかたちで申し込まれる方がいます。ケイシーさんが言われるように、それぞれのコミュニティで動機が違います。特に都市、ロサンゼルス隣のオレンジカウンティでは今申し上げたような動機で里子を預かるのが一般的です。

堀：

ボーイズタウンでは全米で里親のリクルートをされていると思いますが、ターゲットを絞っておられるのか、幅広くやっているのか、教えてください。

ステフ：

ひとつ強調したいポイントは、国のトレンドや子どもたちの現在のニーズについて知るということです。これが私たちのリクルートの道筋を作ってくれます。治

療や医療サービスの必要な子どもが増えている傾向があれば、こういった子どもたちを受け入れられる家族のリクルートに力を入れます。リクルートは終わりのない活動ですが、どこに焦点を当ててリクルートするかは国のトレンドやニーズによって変わるので、常に目を光らせています。また、毎年リクルート活動の計画を立てます。これにはいくつかの段階があります。ケイシーが先ほど草の根レベルの活動について紹介していましたが、それはとても大切です。例えば、教会や地域でチラシを配って、地元の人たちと会話をします。里親さんにも経験を語ってもらう場を作ります。あとは、登録している里親さんの友達や周りの人たちの中に里親に興味のある人がいないかを聞きます。私たちの里親さんはトレーニングを受けているので、満足度が高く、里親家庭として成功しています。そういった経験や体験が口コミで周りの家庭にも広がっていきます。データによると、里親が1組登録するためには、100組の潜在的な里親にリーチしなければいけません。つまり、私たちのプログラムに里親が1組参加するまでに、私たちは100組にリーチしたことになります。また、データによると、里親登録までに18～24ヶ月かかります。すぐに決断をするわけではないので、里親にコミットしてもらうまでには、たくさんの人にリーチして、教育しなければいけません。

ケイシー：

ケンタッキー州についてひとつ追加でお伝えしたいことがあります。今、里親を必要としている子どもや里親に措置したい子どもの統計を見ると、大半が12歳以上の男子で、一番措置が難しいです。もっと幼い子どもは男女どちらも措置しやすく、女子はどの年代でも措置しやすいです。反対に男子は年齢が上がるほど、特に15歳～18歳が難しくなります。この年代で施設養護にいる男子の場合、不可能という言葉を使うのは避けたいですが、里親に措置することは相当難しいです。そのため、先ほどステフのリクルートの話にもありましたが、一番ニーズの高い、高年齢の男子を受け入れてくれる里親家庭を探しています。マッチングのときには里親の意見を取り入れるので、「この子どもを受け入れることには気が進まない」と言われることもあります。リクルートの時点で家族には出来るだけ措置についてオープンになって欲しいということを強調しています。多くの場合、一度その年齢の子どもを預かると、今まで聞いていた酷い話は必ずしも本当ではなかったということがわかり、もっとその年代の子どもを預かるようになります。ただ、最初の第一歩を踏み出してもらうことが大変です。

堀：

他にマッチングに関してご質問ありますか？

鈴木：

厚生労働省の障害福祉課にいる鈴木と申します。リクルートで専門的な里親になると、収入はどれくらいに

なりますか？里親を増やしていくとなると、どうしてもでてくるのが、障害部の方でもそうなのですが、質の低下です。お金儲けで里親になる方が出てきたときに、防止やチェックする方法はありますか？

ケイシー：

それは難しいですね。一度家族が里親になりたいという興味を示して、認定を受けたら、どのような意図で養育をしているのかを知ることは難しいでしょう。収入に関しては、毎年ケンタッキー州はケアの必要な子どもの人数とレベルを見て、グループ分けをします。行動に問題があり、最もケアの必要な子どもは一番金額が大きいです。もし、レベル3の子どもを預かるとしたら、レベル4や5よりも金額が下がります。施設養護では、一番高いレベルのケアを必要とする子どもが284ドル、里親制度のレベル5の子どもは46ドルです。しかし、それは実際にかかる全てのコストを補うわけではありません。児童福祉制度内の子どもたちは医療保険が適応されるため、治療費は国が支払ってくれます。他にも洋服や学費などは国の補助金が適応されます。そのため、国から支給される金額は子どもを育てる上での実際の費用を表しているわけではありません。

里親のスーパービジョンによって里親の品質を保っています。このスーパービジョンは必ず受けなければいけません。また、子どもの養育に関わる日々の出来事を記入する義務があります。例えば、子どもが何か特記すべき行動をした時や投薬状況などを記録し、月に一度州にレポートを提出します。これはそれぞれの家族が行うことなので、施設としては受けたセラピーやケースマネジメント・サービスなどを記録して州に報告します。

施設が提供するケースマネジメント、セラピー、学校ベースのサービスなどを含む補助サービスの費用は国がカバーしています。これは1日あたりのレートとは別に支給されます。ただ、州や私たちの施設の基準があり、里親は毎年決められた時間のトレーニングを受けなければいけません。また、治療を提供できる里親家庭として認可を受ける場合には、追加のトレーニングが必要です。家族の中には、どんなレベルの子どもでも受け入れたいというところがあります。その場合、全ての認可基準を満たしていることを確認し、他の家庭よりも多くのスーパービジョンを受けることとなります。もし、認可が間に合わないなどの問題があると、その家族とミーティングをして、必要な手続きを行います。このミーティングの内容は記録されます。子どもへの支援と同じで、里親とは対立するのではなく、会話をします。建設的なアプローチを取らなければいけません。里親がもっと良くなるために悪いところを指摘するだけではいけません。ただ、里親には責任があり、安全問題に発展しては困るので、常にフィードバックを提供し、問題解決をします。

ステフ：

お金のためだけに里親になると、そういった条件を全てクリアすることが大変になっていき、続ける価値を見出せなくなるでしょう。

ケイシー：

その通りです。プレサービスの条件とその後の条件が厳しいので、お金目当ての人たちはふるいにかけられます。それに、認定や条件をクリアするためには多くの労力が必要です。一定期間子ども受け入れを断り続けると、アクティブな里親ではないと見なされます。この状況を「家を閉める」と呼んでいます。また里親として申し込めるまでには、一定期間待たなければいけません。

私たちは常に激しい競争力の中で戦っています。私たち以外にも活発にリクルート活動をしている団体がいっぱいあります。里親には国が支払いをしているのだから、どこに所属しても変わらないのでは？と思うかもしれませんが、プラスで費用を支払う団体もいます。例えば、国から支給される額に上乗せするかもしれません。しかし、そういった団体が高い品質を保っているとは限りません。そのため、里親にとって魅力的な団体で、所属したいと思わなければいけません。ボーイズタウンはその良い例で、全米のリーダーとして認められています。今日本でこのようにお話をしているのもそれを物語っています。

堀：

鈴木さんがおっしゃったお金儲けでやっているような質の低い人たちは自然に落ちていくということですね。次は、リクルートした里親さんをどのようにトレーニングしていくのかに入っていきたいと思います。今は里親さん向けにたくさんの研修があると思います。皆さんの地域ではいかがでしょうか。

フロア：

和歌山県のNPO法人でCSPの実施をさせていただいているものです。里親さんに対してCSPをどのレベルで教えられるのかを知りたいです。例えば、一般の保護者向けの親クラスであるのか、指導者クラスのものであるのか。

ステフ：

里親には基盤として、CSPトレーニングを受けてもらいます。そして、追加のトレーニングとして、実子へのペアレンティングと里子への専門職としてのペアレンティングの違いを教えます。ボーイズタウンの施設プログラムのトレーニングを受けたことのある方がこの中にいると思います。施設的环境は家庭環境とは違うので、ペアレンティングモデルとは少し異なります。例えば、ほめる割合と正す割合が施設養護のトレーニングの場合、8:1ですが、家庭環境では4:1と教えます。介入の方法や基本的な教育法は行動の形成、スキ

ル指導、スキル練習、スキルをほめて正す方法は家庭と施設では似ていますが、異なります。里親のトレーニングもこれと同じです。CSPを使って里親をトレーニングすることで理解の枠組みを作り、6～7セッションを全て修了することでコミットメントを見て、次のステップに進む準備ができていのかを判断します。トレーニングにはお金がかかるので、一番コミットしてくれる家族に費用を使いたいと考えます。CSPはリクルートを始める良い入り口だと思います。ただ、里親プログラムは実子へのペアレンティングとは違います。また、治療と一般的な養育も違います。子どものレベルやニーズによって養育から治療の領域に入っていきます。そのため、治療施設や治療里親、一般的な里親などに分かれています。それぞれ必要なスキルが変わってくるので、中身も異なっていきます。

ケイシー：

私の施設では、ステフの話にあったように、里親の本気度を図るためにCSPを活用しています。他に提供するトレーニングにもCSPの基本的な原理が当てはまるようにしています。幸運なことに私の施設は施設養護と里親の両方を運営しているので、子どもが施設から里親へ措置されていく過程を見ることができません。どちらの環境でも基本の原理は一緒です。私たちはボーイズタウンの心理教育モデルを施設で使っていますので、その後CSPを受けた里親に措置されると、同じ教育モデルを使った養育が行われます。考え方や言葉、全ての流れに一貫性があるため、子どもにとってもスムーズな移行になります。例えるなら、皆が同じ台本を読んでいるような感覚です。

ステフ：

朝の話に戻りますが、こういったことが施設の移行をスムーズにしています。すでにハイレベルなプログラムを実施していた施設の場合、教育、トレーニング、個人の役割の定義、プログラムの実践が行われていました。施設でしっかりとしたモデルを作り上げてきたため、里親家庭や地域、インホームサービスなど様々なレベルの支援が可能で、先ほどケイシーの話にもあった通り、レスパイトのために週末に子どもを施設に預けることができます。施設環境にいたとしても、共通したプログラムによって一貫性が生まれます。里親に措置された子どもにセラピーが必要な場合、ケイシーの施設のプログラムに入ることで、一貫して社会スキルモデルをベースとした治療を受けることができます。子どもがカウンセラー、心理士、ディレクター、里親、誰に話しても一貫性があり、結合力が生まれます。施設養護から里親へどのように移行するかという質問に戻ると、子どもがどこに措置されてもケアのレベルを維持することのできるモデルが必要です。

堀：

具体的な話になりますが、CSP管理者でこれから里親支援をされる方もいると思います。例えばスキル練習

でいうと、里親さんにはどれくらいのレベルを求めていますか？

ケイシー：
クラスへの出席が最低条件です。

堀：
はじめは、参加からスタートということですね。では、そういったプレトレーニングが終わったところに、どうやってマッチングしていくか？マッチングに入っていきたいと思います。マッチングからインケアに関しては、どうでしょうか？

フロア：
午前中のお話の中でも、子どもにはレベルがあるということおっしゃっていました。施設に入る子どもや里親家庭に入る子ども。うまくいくパターンやちょっと難しいなというパターンの棲み分けは見えていますでしょうか？

ケイシー：
ケンタッキー州は、各郡に子ども家庭支援局を持っています。アセスメントの結果、子どもが保護されることが決まったら、その結果が州の中央局に送られます。そこから、州の職員がケースを担当し、どこに措置をするのが最適かを考えます。行動のレベルによっては、施設養護が必要だと判断されます。これは行動が改善されるまでの短期間かもしれません。そこからは、州の支援提供者に子どもの情報や必要な治療を伝え、措置できるかを確認します。これは施設レベルの判断です。施設が受け入れOKを出したら、その子のレベルにあった里親家庭を探します。施設入所の場合には、定員の問題もあります。たまに空きがない時に委託要請を受けて、その子どもの入所を断ることがあります。すると、里親はどうだ？と聞いてきます。しかし、そういうやり方ではうまくいかないのです。一度このレベルのケアが必要だと判断したら、そのレベルに合わない里親家庭には措置できません。少し調整が必要になりますが、レベルに合った場所に措置しなければいけません。私たちの施設のコテージでは、里親に移行することが目標になっているところもあります。もし、再統合がパーマネンシーの目標ではない場合には、次のステップを入所した日から考え始めます。

堀：
ボーイズタウンにもそういうガイドラインはあるのでしょうか？

ステフ：
私たちのシステムもケイシーが説明した通りです。アセスメントを受けた子どもが私たちの施設に紹介されてきます。多くの場合は裁判所や州からの措置になり、いくつも団体が絡んできますが、プロセスは一緒です。施設入所が必要な子どもを紹介されても、部屋の

空きがない場合には措置をすることができません。ケイシーの説明と全く同じですが、ボーイズタウンの場合は組織がとても大きいです。多くの施設はベッドが10台しかないですが、ボーイズタウンのホームキャンパスには家が70件あり、それぞれに6～8名の子どもが入ることができます。キャパがあるので、紹介を受けたら子どもを受け入れることは他の施設よりはしやすいですが、初期のアセスメントは委託要請をしてきた団体が行います。

ケイシーのと同じで、子どもが施設に一定期間いなければいけないというアセスメントを受けていたら、施設に措置します。ただ、目標は施設のような制限の多い環境ではなく、より制限の少ない環境に移行することです。はじめからゴールを見据えて計画を立てなければいけません。

久山：
ロサンゼルスカウンティのシステムは少し違っていて、もう少しシステム化されています。子どもの虐待やネグレクトを発見したら、子ども家庭支援局が通報を受け、カウンティのソーシャルワーカーに情報が送られます。データベースに子どもの情報が入力されると、それが各団体へ送られます。そのため、受け入れ可能な里親や施設があれば、ソーシャルワーカーはマッチングを始めることができます。一番の問題は、子どもを措置するまでの時間に国が制限を設けていることです。時間との戦いになってしまいます。中には、団体や里親の条件に合わない子どもが出てきます。時間の制限があることはいいのですが、政策が現実に追いついていない部分があります。

ケイシー：
午前中のプレゼンテーションに話が少し戻りますが、施設養護から里親に移行したときにスタッフの仕事はどうなったのか？という質問に対して、施設養護の必要はなくなるという話をしました。私の施設では、一般的な施設養護からより症例やニーズに特化した施設養護を提供しました。ケンタッキー州内の別の地域で何回も措置変更を繰り返している子どもを施設に受け入れたら、州政府から追加で資金をもらうことができるパイロットプログラムを組みました。私たちは、州の中でこのサービスを提供している唯一の施設です。先ほどのお話の通り、子どもは1～5にレベル分けされ、とても措置するのが難しい子どもたちをレベル5と呼びます。このモデルを里親にも反映させました。来年の予算について話し合うときにも、難しいケースを担当できる里親家庭を抱えていると説得力があり、交渉が有利に進みます。施設として周りとは差別化する機会は必ずあります。他の施設にはできないサービスを持っていることは、財政支援をしてくれる団体と話す上で大きな強みです。

堀：
リクルート、トレーニング、マッチングした子どもた

ちが実際のインケアに入ってくると、良い行動が増えてきたり、または難しくなったりすると思います。インケアのプロセスの中で起こっていることや課題などを映していきたいと思います。里子さんを預かっている松山さんは、インケアで起きることに対して何かありますか？

松山：

今預かっている里子は、本当に問題行動がなくて、有難いなと思っています。ただ、養育者として、その子に対して何をしてあげるのが一番なのかを考えるとあります。最低1ヶ月に1度のスーパーバイズは絶対に必要なだろうということをすごく思っています。日本にもそういった枠組みがほしいです。実際の里親に対するスーパーバイズをどのように行っているのかを聞かせていただければありがたいです。

堀：

例えば、頻度や24時間いつでも連絡できるとか、そのあたりの具体的なことを伺ってもよろしいでしょうか。

ケイシー：

スーパービジョンは私たちが使っているモデルで、一人一人に役割があります。里親の仕事は年中無休の仕事です。私たちは里親からのレポートを受けています。問題を早期発見できると、私たちもすぐに問題解決に向けて里親を支援することができます。里親も支援されているという気持ちになり、必要な支援を得ることができます。ケースマネージャーたちは、最低でも週に1回里親や子どもと連絡を取ります。家庭訪問をすれば、直接観察のスーパービジョンになります。電話は常にします。これは必須ではありませんが、常に里親は質問や必要なことがあればケースマネージャーに連絡をとることができます。施設と州によって義務化されているのは月に一度のレポート提出です。これはケースマネージャーが提出する情報です。医者、心理士、学校のセラピストなどの治療チームが報告をします。現在の状況を把握するだけでなく、支給額が関係してくる子どものレベルを確認しなければいけません。子どもを支援するための情報によって、必要なケアが提供され、子どものレベルに見合った金額が支給されます。

堀：

他にインケアについて起こってくる問題について質問はありますか？

久保：

インケアについて教えてください。子どもたちへのさまざまな支援やサービスをお持ちだというご説明を一番始めにしてくださいました。例えばこの子にはカウンセリング、この子にはトラウマケアというように、州のアセスメントに対してプランを組んでいくのは

エージェンシーのお仕事でしょうか。もう一点、実親に対しても非常に意識して配慮するようになりましたというお話をケイシーさんがしてくださいました。日本の里親は、実親の支援をしていくことが求められるようになっています。この点については、米国ではどうでしょうか。

ケイシー：

実親の関わりを推進する動きがありました。特に長期のパーマネンシーゴールが再統合の場合には、実親がそのプロセスに関わっていかなければいけません。ケンタッキー州が日々奮闘している大きな課題で、子どもが措置される原因の一つにオピオイド依存があります。こういった薬物依存が原因で里親に措置された子どもの長期的な目標は家族再統合になります。こういったケースでは、政府や司法によって決められた治療を受けなければ再統合のプロセスを始めることができません。このプロセスの途中でも、親には親権があります。治療や支援計画など、子どもへ何らかの変化を与えることには実親が関わってきます。今、州が進めようとしている「バランスのとれたアプローチ」では、実親に敬意を払いながら、もう少し里親にも決定権を与えるようにするという動きがあります。これによって実親と里親のバランスを取ることができます。私たちが何かを決定するときや、全ての介入やケアにおいて、安全を第一に考えます。子どもの安全、家族の安全、家庭の安全です。家にいる幼い子どもや兄弟が措置に与える影響をアセスメントします。子どもが性的虐待を受けた過去があれば、里親の家族構成を確認します。また、性的虐待の被害者だけでなく、加害者である場合にも家にいる全員の安全を考えて措置しなければいけません。最も制限の少ない環境は子どもが成功する可能性を増やしますが、こういった安全性に関することも考慮しなければいけません。

堀：

主なアセスメント、サービス提供は、現実場面ではエージェンシーがほとんどやっているということですね。

ケイシー：

州が主導で子どものニーズや必要なケアのレベルをアセスメントして、施設や団体に委託要請を出します。最初のアセスメントから状況が変わっていることもあるので、委託を受ける施設は再びアセスメントを行います。その後、子どもにとって一番の支援方法を考えます。

堀：

最後にスーパービジョンに関して、ひとつお聞きしたいと思います。実際里親支援をされている方がこの中にもいらっしゃると思います。スーパービジョンに関して、実務でやっていて、ここがなかなか難しいという質問がある方はいますか？

中村：

愛知県の児童養護施設で里親支援相談員をしています中村と申します。私が相談員としてやっていくなかで、実際に難しいなと感じているのが、一つの里親家庭に対して、施設の職員、児童相談所の職員、あとはコーディネーターなど複数の支援員の方が関わりますが、なかなかご家庭に対する支援方針が擦り合わないという難しさを感じます。里親さんもどれを取り入れていいのかと迷われることが実際にあります。支援に対する連携はどのようにされているのでしょうか。

ケイシー：

支援員のところで皆さん顔かれていましたね。これは、よくあることです。ケンタッキー州はラッキーなことに、皆が同じ枠組みの中で動いているため、そこまでバラバラな方向に進むことはありません。ただ、そこに行き着くまでに時間がかかりました。私たちが専門機関として結果を出したことで、州政府と自治体と同じ方向を向くように前向きに協力してくれています。自分に向けられた期待値や皆が何を求めているのかを里親さんが理解すると、ブれることなく進められます。2人の人間から同意を得ることは簡単ではありません。私たちがこういった人たちを一つにまとめる

ために使っているのは、ラップアラウンドサービスです。様々な支援者や子どもの家族が一丸となって、子ども中心の支援計画を立て、同じ方向に進みます。ラップアラウンドを通して、里親家族、実親家族、子どもの生活に寄り添う人たち、通っている教会の教会長、友達など子どもに関係している全ての人たちが協力して、同じ目標に向かって進むことができます。子どもと家族のストーリーを描くことを助けてくれます。皆が異なったテーマのストーリーをつぎはぎするのではなく、一つのテーマで書き上げることができるのです。支援の中で共通言語を与えてくれます。

堀：

ありがとうございます。時間の関係ですべてにお応えできるということは難しかったのですが、一つの方向性が支援を成功させるということは一致していたのではないかなと思います。我々もこれで終わるのではなく、今週末から、ボーイズタウンの里親サービスモデルを集中的に学ぶ機会がございます。学ぶだけでなく、北海道、東京、大阪、宮崎で、このモデルを紹介するワークショップを計画しておりますので、興味がある方は問い合わせいただければと思います。これでディスカッションを終わりたいと思います。



パネルディスカッション（東京）



堀：今回のディスカッションは、せっかくの機会ですので、フロアの方からたくさんご質問をいただける形で進行していきたいと考えております。午前中、昼から発表には大きく3つの流れがありました。1つめは、リクルートからマッチング、そして措置するまでに里親にどんな教育をしていけばいいのかという初期教育についてです。2つめは、里子さんを迎えた里親さんがいるんな場面に出くわしていくなかで必要なケアや支援方法。3つめは、その状況をずっと維持していくために必要になる定期的なスーパービジョンについてです。基本的な流れとして、この3つを中心に話を伺っていきたいと思います。

それでは、リクルート、マッチング、初期教育というこの前段のところ、フロアの方からきいていきたいと思っております。お子さんが措置されるまでの中で、もう少し具体的に話を聞きたいことはありますか？

高本：社会福祉法人麦の子会の高本といいます。アメリカで措置されているお子さんが、里親さんに移るときのマッチングの流れというか、どのような手順でマッチングが行われているのかということお聞きしたいです。もう一点は、里親さんに対する初期教育というのはどのようなものが組み立てられているのでしょうか。私は札幌市の里親トレーニング事業を受託しているので、プログラムの組み立ての参考にしたいです。受託する前に何をしておくことが大切なのかをアメリカの例から教えていただければと思います。

堀：それでは、マッチングがうまくいくための手順と知識、事前準備に何が必要であるのかということについて、

ケイシーさんをお願いします。

ケイシー：マッチングの手順について、プレゼンでも申し上げましたが、里親の役割と里親として期待されていることを明確にすることが大切です。ステフの話にあったように、こどもがトラウマを受けるとはどういうことで、里親として何をしなければいけないのかを理解することです。あとは特定の症例に着目したトレーニングや子どもの発達に関するトレーニングもあります。子どもの特定のニーズによって個別化されたトレーニングは、子どもとのマッチングが成立しそうになったら行います。事前のトレーニングとしては、子どもの発達、里親の目標、里親の権利などに関する内容を学びます。里親になりたいと思う人の中には、里親の条件や期待されることを完全に理解していない人がいます。そのため、子どもを家庭に措置する前には、里親に何を期待するかをしっかりと伝えなければいけません。

堀：初期教育に関して、教育の評価方法や措置するまでに何をどこまでトレーニングするのかなど、具体的なことについて、ステフさんをお願いします。

ステフ：アメリカでは、里親の認可を受けるために州が定めたトレーニングを受ける必要があります。ボーイズタウンの里親になる前に、まずは州によって定められている条件をクリアしなければいけません。条件の中には、バックグラウンドチェックや決められたトレーニング、家庭訪問などがあります。そういった段階を経て認可を受け、里親はボーイズタウンにやってきます。私たちの里親トレーニングは5日間のコースです。

CSPトレーニングを終えた後に5日間の里親トレーニングを受けます。そのため、私たちが里親へ子どもの委託を考える前に、まずは最低でも11日間のトレーニングを受けなければいけません。

措置については、それぞれの里親家庭には様々な強みがあり、専門性のレベルや里親としての能力も異なります。最初のアセスメントは委託要請をしてくる機関、つまり我々の場合にはほとんどが裁判所ですが、そこが治療里親、里親、施設など措置先を決めます。我々は要請を受けてから、子どもを受け入れる空きがあるかを確認します。ボーイズタウンは様々なニーズを持った子どもを受け入れることができます。例えば、医療サービスの必要な子どもがいたら、そういった子どもを預かった経験と専門性のある家庭に措置します。まずは、家族の強みを理解し、子どものニーズに合わせてマッチングをします。ケイシーの話の通り、里親が力をつけていったら、子どもの行動、身体、学業などに影響を与える症例別のトレーニングを提供します。

フロア：

胎児支援者、里親さんも含めてなんですけど、ポテンシャルがそれぞれ違う人がいて、そのポテンシャルをどうやって評価するのでしょうか。そういうフォーマットはアメリカにはあるのですか？

ステフ：

ボーイズタウンで使っている評価ツールがあります。中にはボーイズタウン職員が開発して、全米で使われているものもあります。また、スーパーバイザーやファミリーコンサルタントの意見に重きを置いています。彼らが一番家族の力を理解して、どのような支援が必要なのかをわかっているからです。

久山：

ロサンジェルスカウンティの場合は、里親エージェンシーが継続したリクルートをしています。その中で、ソーシャルワーカーが方々から里親のトレーニングクラスを持ちます。参加者は定められた時間と内容を満たさなければなりません。同時にソーシャルワーカーは、里親になりたい人たちの希望を聞いていきます。どういうお子さんが自分たちに合っていると思うのか、どういうお子さんを希望するのか、年齢や人種的な背景、宗教的な背景、様々なものがあります。これらを全てデータベース化します。ネグレクトや虐待など様々な問題が起きると、日本でいう児相が介入します。児相のソーシャルワーカーは、介入した段階でアセスメントとデータベースを作ります。カリフォルニア州の場合には、マッチングしなければならぬ期間が非常に短くなっています。そこでソーシャルワーカーたちはデータベースに子どもたちの写真や情報が上がってきた段階で、所属している里親の中にマッチングできる人がいないかを探し、委託要請を出します。このマッチングは非常に短い期間で行われるので、先

ほどのケンタッキー州のように余裕を持ってやることができません。すると、行くところがない難しいお子さんはどうするのか？それぞれのエージェンシーやレジデンシャルケアで一時的預かりという形になります。そこにレジデンシャルケアがなくなる理由があるわけです。

堀：

おそらく基準・ベースがあって、子どもによってはオプシオンの教育があり、それでも難しい子どもたちは施設に行くという、構造になっているということですね。他に初期の段階での質問ありますか？

フロア：

千葉県の中央児童相談所の児童福祉士で里親担当しています。里親さんになりたいと言って、初めての面接に来られる方は私共のところだと、どうしても縁組里親の方が多いです。養育里親さんを集めるにあたってどのような呼びかけや表現を使ってリクルートをされていますか？アメリカでどうしているのかお伺いしたいです。

ケイシー：

今、広告を活用しています。「エブリデイ・スーパーヒーロー」という名前の広告です。子どもと大人がつけているマントが風でなびいている写真を使っています。私のプレゼンで紹介したピアソン先生の言葉に戻りますが、子どもには味方になってくれる大人が必要です。その一人が子どもの人生を変えることができるのです。機会があったら、ピアソン先生のTEDの講演を聞いてみてください。大人が子どもの人生に与えることができる影響について上手にお話しされています。こういった背景からエブリデイ・スーパーヒーローの広告を思いつきました。お祭りや健康フェアなどでブースを構えているのですが、誰か興味があるという人がやってくると必ず聞くことは「なぜ？」です。なぜ興味を持ったのか、何がきっかけで私たちのブースに立ち寄ったのか、どこで私たちのことを知ったのか。そこから、その人が何を期待しているのかを聞き出し、私たちは真正面から里親になることがどういうことなのかを話します。また、長期的な目標を聞きます。中にはハッキリと「里親はしたいけど、養子はほしくない」と言う家族や反対に「自分たちは子どもに恵まれなかったので、里子を養子にしたい」と言う家族がいます。家族の現状を知り、考え方やニーズを聞き出し、そこから形作っていきます。守れない約束はしませんが、とても正直に話し、オープンなコミュニケーションを心がけています。何も質問がない人よりも、心配や恐怖などを話してくれる人の方がいいと思います。それは、その人が正しい方向に考えている証拠だからです。傷ついたり子どもを受け入れ、愛を注ぎ、癒していく過程は素晴らしいですが、実際は良い日があればとても大変な日もあります。最終的には、子どもの味方になるということなのです。つまり、子どもの

良い日だけでなく最悪の日にも寄り添ってあげることです。

堀：

久山先生はいかがでしょうか。

久山：

ケイシーさんが言ったように、里親になりたい人たちの中には、最初から養子縁組が目的の方もたくさんいらっしゃるわけですね。また、最初から自分たちは赤ちゃんがほしいと言って、里親エージェンシーにやってくる人もたくさんいます。オレンジカウンティの場合、一番多いのは教会などのコミュニティを通して、里親をしている人の話を聞いて自分たちもやってみようと思う人たちです。年代を見ると、自分の子どもは既に家を出ていて、夫婦ふたりだけになった人たちが多いです。このタイミングでもう一回、若い時にはできなかった子育てを2人だけでしてみようかという話になります。この年代の里親の大きなプラスは、幼い子どもだと体力的に難しいので、中学生や高校生の子どもを好んで預かります。コミュニケーションを通して、中学生以上の子どもを育てていくという考え方の人が多いです。子どものために良い影響を与えたいと思う裕福な里親の層がオレンジカウンティにはいるので、重要な措置先です。

堀：

素晴らしいですね。それでは、この1つ目の初期段階は他にありますか？

フロア：

CSPに巡り合ったきっかけは何ですか？日本では研修を受けてから里親登録をして、申請をする流れになっていますが、研修を受けないと申請ができないから、仕方なく研修を受ける方が多いと思います。初期の段階でもう少し強い動機づけや「里親さんはこういうものですよ」と伝えてもらう機会があればいいなと思います。その場合、どのような研修や話の場があったらいいと思いますか？

松山：

まず私がCSPと出会ったのは天理教の里親連盟を通じてです。奈良県の天理市で、堀先生を招いたCSPの研修会がありました。そこで相当数の里親が堀先生の話を書き、反響を呼んだことがございます。それがまず私の第一歩でございます。行政とかの研修会でCSPに出会ったのではなく、そういったご縁で知りました。普通に滋賀県で担当里親をしていただければ巡り会えてなかったのではないかなと思います。もう一つの質問、里親の事前研修の中でどのようなスキルの講習会があったら一番いいのかという話。非常に難しい問題ですが、先程も会場の方とこんなにスキルが必要なのだよと話していました。最初は、ボランティアにリクルートするわけですから、あまり高い

ハードルを最初に設定すると「いや、そんなに難しいなら」と尻込みしてしまう可能性があります。職業とする人であれば、ある程度のことを言われても飲み込めるでしょうけども、ボランティアですからね。研修会をするのであれば、あまりショックの大きくないような、でもエッセンスは伝えておこうという内容になるのではないのでしょうか。事前に周知な準備をすることや、これとこれは伝えてこまめにしよう、みたいな正確性が必要なのではないかと思います。

堀：

それでは次に、インケアに入っていきます。様々な準備をして、子どもが里親さんのもとに来ました。午前中のプレゼンテーションでもあったように、思い浮かべてきたロマンチックな光景と現実とは違った、ということが次にやってくると思います。それをどう支えていくのがいいのかなどフロアから質問をお受けしたいと思います。

フロア：

私は大学院で、いままさに里親さんとか養子縁組を習おうとしているところです。日本で言うと、児童相談所というのがあって、それが行政になります。ボーイズタウンなど実際の運営をしている団体と行政の役割分担を円滑に行うにはどのようにしたらよいでしょうか？

ケイシー：

ケンタッキー州を例にとりますと、先ほど他の団体と合併する理由についてお伝えしましたが、協力関係を作り、プロセスの中で意見を出し合い、施設養護から里親やインホームサービスに向けて真剣に取り組んでいる姿勢と成果を見せることで、州政府は他の団体と一緒に協力することを前向きに捉えるようになります。州から何をしなければいけないかを指示されることもあります。目標としては州と協力してプロジェクトを進める体制を目指します。私たちは州政府が新しいプロジェクトを始めるときに、何度もイニシアチブをとってきました。パイロット事業なども、私たちは州から最初に電話をもらう施設の一つです。これは、今までの実績や上手な資源活用と運営の賜物です。良い結果が得られるように努力することで、政府の期待に応えています。

堀：

それでは、インケアに関する質問はありませんでしょうか？

前原：

カリタスの園 竹の寮の前原といいます。インケアということで麦の子さんに質問です。先ほどのKさんのような、障がいの程度が重い人に麦の子さんではどのように、予防から効果的なほめ方の流れをしているかをもう少し詳しく教えてほしいです。

堀：

発話が難しい子どもたちに、教育法をどう使うか、ということですね。これは実際やってもらうのがわかりやすいと思うので、子ども役と大人役に分かれてやってもらおうと思います。

菊池：

私が職員役をします。まずは、予防的教育方から。「Kさん、今お話してもいいかな？職員とお話したいときに、1の力で、こうやって職員の肩を触ってほしいんだよね。できるかな？やってみようか。1のちからでここ触ってみて。すごいね！上手にできたね！そうやって呼んでくれたら一緒にお話しようね！」というのが予防的教育です。続いて効果的なほめ方です。花の水やりのシーンを実際にやってみたいと思います。「ご飯が終わったので一緒にお花の水やりに行きましょうか。すごいね、すぐ立って行けたね。じゃあ、ここのホースを使って、お花に水をあげてください。わ～すごいね！すぐにね、ホース使ってお水あげることができたね！じゃあ、今日は上手にできたから、グミ食べようね。上手だったね。」という風にやっています。

堀：

最初、取り組み始めた時は、障がい重い方には難しいのではないかと我々も考えていました。麦の子の職員さんたちが、繰り返し、繰り返し、もう毎日同じことを繰り返すことによって、行動が大きく変わってきたというようなことを我々も見せていただきまして、非常に素晴らしい取り組みだと思います。

河村：

千葉県の児童養護施設で、里親支援専門相談員で3年目の河村と申します。担当地区でコミュニケーションがとれてきた里親さんが何人かできていて、すこし関わりが増えてきたときに、里子さんの養育についての相談を受けます。私がいますごく悩んでいるのが、里親支援専門相談員に子どものケース内容がほとんど知らされていないことです。里子さんのそもそもの自立支援も知らされていない。それは、里親支援専門相談員だけでなく、里親さん自身も、ほとんどわかっていないような状況で質問をしてくださいます。それを受けた私は悩みをきいて、共感することしかできていないという状況がいま起こっていて、どうにかならないかなと思っています。ご意見お聞きしたいです

堀：

今の質問であれば、児童相談所、里親、里親を支援する人たちと、アセスメントから支援計画までが共有されていないということですね。実際の取組みの中で、アセスメントから支援計画ができていくプロセスをお願いします。支援計画は、エージェンシーが行うのか、それとも共有して行うのでしょうか。

ケイシー：

全てのケースは違うので、まずはアセスメントから始まります。質問では、そのケースに関わっている他の人からのアセスメント結果や情報共有がないということでした。ここで協力関係の重要性に戻ってきます。里親との関係を構築していない場合、入手可能な情報について他の支援者に共有しない場合があります。既に家族と関係構築ができていると「ここの団体のこの人はこういうことをしていました」という情報や欲しかったアセスメントの結果などが手に入るかもしれません。私たちの業界では、信頼できない不完全なデータに頼らなければいけないことがよくあります。これは既に難しい仕事をさらに難しくします。私の施設では、足りない情報やコミュニケーション不足で伝わらない内容を補足するために多くの時間を費やしています。自治体や協力団体、里親や外部の支援者との良い人間関係の構築、オープンなコミュニケーションが大切です。

堀：

そうすると、初期情報というのは、自治体が持っているということでしょうか。里親エージェンシーはその情報だけでなく、エージェンシーでも独自のアセスメントを行う、というような流れですか？

ケイシー：

はい。まず州が独自の評価をします。ステフの話にもあった通り、その結果をまず見て、子どもを治療里親、一般的な里親、施設に措置します。これがプロセスのはじめの段階です。手元にあるのは、以前の入所や検査のときの古い情報かもしれません。子どもの入所時には、私たちの施設独自のアセスメントを実施するように国から決められています。残念ながら、もらっていた初期情報と全く違う結果になることがあります。わざとそのような結果になっているとは言いませんが、里親に措置したい子どもだったら、その子どもにとって最善の結果になるように考慮します。子どもがやってきたら、総合的なアセスメントをして、子どもが進むべき方向性が間違っていないかを確認します。もしかすると、子どもは施設に短期間入所しなければいけないかもしれません。そこでうまくいけば、里親に移行することができます。それぞれのステップでアセスメントを行うのは、私たちの仕事を評価するだけでなく、子どもの最善の利益になっているのかを確認します。

堀：

信頼関係をつくってコミュニケーションをとっていくしか、今の段階ではないということでしょうかね。

田中：

北海道の麦の子会の田中といます。うちの法人の方でもKさんの事例で出ていましたけど、問題行動が

多い利用者さんに対しての支援、コンサルがなかなか難しいなと思っています。ケイシーさんの里親さんの子どもたちでそういう問題行動や暴力が増えてきたとき、どのようにコンサルをしていますか？

ケイシー：

何をするにおいても安全性が第一です。子ども本人、里親家族、他の子どもにとって危険で守りきれないような状況だと判断したら、その子どもを施設に入れるかもしれません。そこで新たな計画を立てます。もし、そこまでいかない場合には、里親に子どもの危機的な状況に効果的に対応する方法について再び教えます。普段の生活では、危機は頻繁に起きないかもしれませんが、そういった場面で使用するスキルが足りないことがあります。大変なケースの扱い方法をおさらいすることが必要です。ただ、最終的に安全を考慮した上で、子どもと家族にとって最善の利益になっていないと判断した場合には私たちが介入します。もう一度マッチングを見直して、何かがうまくいっていなかったのかを考えます。特に、措置されてすぐの場合にはそこを確認します。そこから、もっと適したマッチングがないかを探します。どちらにしても、一番大切なことは里親に自分のせいではなく、失敗したわけではないと知らせることです。私たちは難しい人や子どもの状況と毎日向き合っています。結果に関係なく、事後対応をすることが重要です。たとえ成功している家族でも、支えられていると感じるように私たちは努力しなければいけません。里親のせいではなく、完璧である必要もないのです。こういったことは起こります。この機会を使って分析し、次にどうしたらいいのかを学びましょう。

堀：

予め里親さんたちも危機的な状況を想定した教育と訓練はされているということですね。インケアについて、他に質問はありませんか？

フロア：

一点だけ、麦の子会の菊池さん尾崎さんにお聞きしたいと思います。僕は児童養護施設の職員で、同じ対応をするということで、非常に苦労しています。実際様々な活動や工夫をされているとは思いますが、やはり効果的な工夫というか、これがよかったなと思うことがあれば教えてほしいです。

尾崎：

発表の中にあつた連絡ノートを職員で見ながら、帰ってきたときに「あ、今日こういうことできたんだねー」と職員全員で伝える「援助タイム」を実施しています。Kさん以外の言葉のできない方も、すごく嬉しそうにされています。コンサルテーションを受ける前までは、一生懸命自分だけがほめていました。コンサルテーションを受けてからは、パートさんとかも含めみんなで一斉にほめています。これは効果的だったので、続

けています。

堀：

最後にスーパービジョンについて、こういったことを維持していくのは、そんな簡単なことではないと思います。実際里親支援をやっている方でも、多くがスーパービジョンのことで苦労し、維持の難しさに直面していると思います。

鈴木：

麦の子の鈴木です。ケンタッキー州の例を通して教えていただきたいと思いますが、実際に里親さんたちを支援するにあたって、スーパービジョンをどれくらいの時間やっているのでしょうか。頻度や時間など、実際のところを教えていただけたら有難いです。

ケイシー：

家族によって変わってきますが、最低でも週に一度は対面の介入や連絡を取る機会を設けます。これは、セラピーなど他の予約とは別に行きます。家族にフィードバックをするというだけでなく、私たちの支援についても里親さんからフィードバックをもらいます。家族がどれくらい支援されていると感じているのか、自分の意見がしっかりと聞かれていると感じているかなどです。なぜかという、プレゼンでも申し上げたように、これらの2つの要素が里親家庭を成功に導いてくれます。この2つの質問は毎回里親さんに聞きます。スーパービジョンの時間に関しては、家族によって異なります。毎月のレポート提出もありますし、スーパービジョンを通じて子どもの進捗状況を観察しなければいけません。子どものレベルによって、州から支給される金額が変わっていきます。そのため、スーパービジョンを行うことで、家族が記録や書類作成に参加する動機になります。家族には作業が面倒にならないように、可能な限り詳細かつ最小限で書くように伝えています。

多くの家族は郊外に住んでいるので、サテライトオフィスがいくつかあります。ケアマネージャーとホームリソースコーディネーターしか在中していないオフィスもあります。州全体に里親家族が散らばっているため、サポートスタッフなどはそのオフィスにはいないのです。そのため、そういう時には対面ではなく電話での連絡を許可しています。ケースによっては、都市部であっても対面で会うことが難しい場合があります。電話はとても簡単なもので、それを常習化したくはありませんが、許可することはあります。たとえば、私が里親でケアマネージャーから電話がかかってきたら、家の中の状態を見ていないので、全て順調にしていると答えるのはとても簡単です。里親家庭に足を踏み入れると、たくさんを感じ取ることができます。

久山：

子どもが里親制度に入る段階で、子どもはいろんなケアのレベルにわかれます。レベルがあることによって、ベースラインが設定されるので、どのようなケアを行うのか決められます。スーパービジョンをする場合に、決められたケアが行われているのかをチェックするのでしょうか？

ケイシー：

はい。このレベルというのは、アセスメントや評価の段階で決まります。どれくらいのケアを子どもが必要としているのかです。そのレベルによって、週に一回のスーパービジョンの条件は変わりませんが、デイリードキュメンテーションと呼ぶ毎日の記録を月に一回提出するように要求しています。子どものレベルを確認する時に一番役立つのがCBCLです。もう一つ子どもの行動チェックリストといってCBCLに似た評価方法があります。そこで報告された行動が激しいほど、子どものレベルは高いと判断されます。そのため、スーパービジョンという面で見ると、一貫性を持って行なっています。施設として、記録をつけることがとても重要なので、毎日行なっているものもあれば、週に1回のものもあります。そして、月に一度は州にレポートを提出します。

堀：

最後に、日本ではまだ始まったばかりの取り組みで、リクルートからスーパービジョンまで非常にやるものがたくさんあると思います。まずはここからはじめてみられてはどうかという提言をお一人ずつからお願いします

久山：

実は明日から3日間の研修があるのですが、この度日本財団から助成をいただきまして、考えたことがあります。里親さんに最低限知っていただきたい内容はなんなのか、というトレーニングから始めるのが良いのではないかと思います。そこでボーイズタウンに問い合わせて、里親さんの訓練、CSPと同時にペアレンティングの技能と里親さんとしてしらなければならぬことをペアにしてやりたいと言ったところ、ボーイ

ズタウンで使っているものを翻訳することを許していただきました。やはり訓練から始めるということじゃないでしょうか。

ケイシー：

この新たな流れを進めていく上で自治体、施設、支援者、里親の代表者がその都度集まることが大切です。子どもと家族を一番に考える共通のビジョンを持ち、そこから同じ方向に向かえるように計画を立てます。子どもに関わる人たちの役割を明確化すること。参加する全員が役割を持ち、意見ができる状態であり、平等でなくてははいけません。こういった状況での開かれたコミュニケーションによって、私たちは成功の道を進むことができ、プロセスの中で貢献することができました。

ステフ：

計画を持ちましょう。全てのいい仕事は考え抜かれた計画から始まります。自分の仕事内容を理解するだけでなく、なぜそれをするのか、そして、どのようにやっていくのかを考えましょう。これらのことが成功に導いてくれます。こうすることで地に足が着いた状態でしっかりとした結果を残すことができます。時に、国からの補助がつく魅力的なサービスがあるかもしれませんが、それを取り入れるための計画がはじめからないのであれば、準備ができるまで待たなければいけません。ユースピリタスも一緒だと思いますが、ボーイズタウンには、何度もサービスを提供して欲しいという連絡が入ります。いい評判があると、自然と人が助けを求めて集まってくるのです。しかし、同時に私たちは多くの機会を断ってきました。成功するための計画や手順、トレーニング、構造がそこになければいけないのです。何を上手にできているのか、なぜそれを行い、どのようにやっているのかをよく考えましょう。そして、そこからブレないようにしましょう。

堀：

ゴールの共有、それに至る計画、トレーニングの開始、という焦点によって、我々がいくべき道が見えたのではないかと思います。



*“When You Help a Child Today,
You Write the History of Tomorrow”
- Father Edward J. Flanagan*



一般社団法人

日本ボーイズタウンプログラム振興機構

address. 〒103-0024 東京都中央区日本橋小舟町 7-2-2F
tel. 03-6206-2104 | fax. 03-5539-3539 | email. info@ibpf-japan.org | url. www.ibpf-japan.org